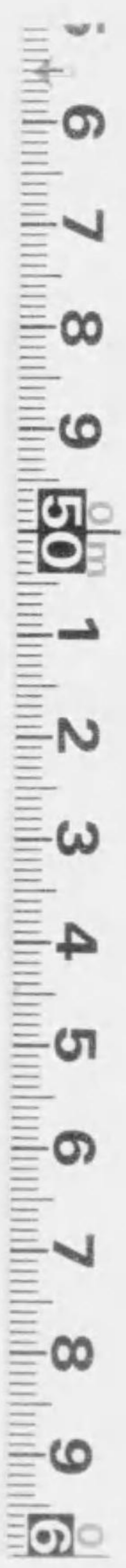


338
241



始



9M69

33.8-241

カシデダ

勝俣銓吉郎 閱
河竹繁俊 譯

Candida.
By Bernard Shaw.

大正
2. 12. 11
内交

序

此の『カンディダ』はバーナード・ショウ氏卅九歳の時（一千八百九十五年）公おほやけにされた喜劇で「神秘劇（A mystery）」と銘が打つてある。『ウォーレン夫人の職業』『武器と人』に續いて發表された作で、前二作に比して更に純なる藝術品として評價されたものである。夫かのショウとは反そりの合はぬウイリアム・アーチャー氏の如きも、此の作だけはショウ癖へまの少ない、渾然たる作品と認めてゐる位で、數ある喜劇中での代表作と推奨されてゐる。而して其の價值から言つても、作者と作との關係、乃至はその形式、内容の或る點より推すも、喜劇と悲劇の差別こそあれ、何となくイブセンの『人形の家』を想見せしむるに足る作である。

然し喜劇とは言ふものゝ、單なる笑を誘ふものとは全然味あじを異にし

てゐる事は無論である。言はゞ薄氣味の悪い喜劇であつて、思はずニヤリとさせられても、何處かに理智の擦りを感じ、口を開いて笑ふと同時に腹の底では苦い思をしなくてはならない類の喜劇である。悲喜劇とも稱せられる近代的喜劇の特質を、遺憾なく備へてゐる作と言つてよからう。また作中に表はされた人物は、作者が特異なる個性を有する人だけに、悉くシヨウ式の婦人、シヨウ式の坊ちやん、シヨウ式中年の馬鹿者である事を承知してゐても、そのいづれにも何等かの點に於て吾等と共鳴する所のものがある。例へば、見るからに弱々しく、知らぬ人に遭へばおづ／＼として録に口も利けないやうであるが、一度真理の盾を取つて立てば、猛惡に突進する、鋭い天才的な詩人マーチバンクスにも——また、彼に戀せられたカンディダの快活で、明敏で、屈托のない、始終明るい心持に満され、而かも決して情のため、にその理智の晦まされ

ない、實際的な新しい女、カンディダにも——また、常に彼の女の支配の下に幸福な夢を見續けて人生を送りつゝある、その夫なるモーレル、即ち習俗的な、偽善家の、空論家の、つまりは大きな赤兒のやうな牧師にも——吾等はそのいづれの人物にも、吾等の幾分宛かゞ鮮明に映寫されてあるやうに感ずる。これはやがて作者シヨウが透徹鋭敏なる觀照を経て、現代を描き、またそれに對し深刻にして情意を盡せる忌憚なき批評を加へたる上に作り、社會の缺陷を暴露すると共に、新しき光明、自覺に導かんとした所以であらう。そこに吾等は切實なる興味を感じ、また此の作の價值を發見するのである。

加ふるに彼の舞臺的技巧は、精緻にして的確なるが故に、その内容、性格、事件をば縦横に餘すところなく舞臺上に活躍せしめてゐる。吾等は此の作を讀むも、また之を舞臺上に見るも、共によく彼の言はんと欲

Staad Theatre, London.

First performance in London by the Stage Society, 1st July 1900.

Candida Miss Janet Achurch
Proserpine Garnett Miss Edith Craig
The Rev. James Mavor Morell Mr Charles Charrington
Eugene Marchbanks Mr Granville Barker
Mr Burgess Mr Lionel Belmore
The Rev. Alexander Mill Mr Robert Farquharson

Royal Court Theatre, London.

April 23, 29; May 3, 4, 6, and 10, 1904.

Candida Miss Kate Rorke
Proserpine Garnett Miss Sydney Fairbrother
The Rev. James Mavor Morell Mr Norman Mckinnel
Eugene Marchbanks Mr Granville Barker
Mr Burgess Mr A. G. Poulton
The Rev. Alexander Mill Mr Athol Stewart

したる「現代」を觀取する事が出來ると思ふ。

大正二年十一月

譯者しるす

カン デイダ

(Candida)

第一幕

或る晴れわたつた十月の朝、ロンドン東北の一廓に於てある。メー
 イフエアの繁華やセント、ジエームス宮の壯麗な幾哩となく離れた思切つ
 て廣い一區域で、其の貧民窟は他のに比べて、町幅も餘程廣く、汚くろしさ
 も厭な臭も少なく、空氣の流通も餘程好い。流行と没交渉な中流社會の
 生活が著しく顯はれてゐる。廣い街、幾萬の住民、それから醜い鐵製の便
 所や、急進黨の俱樂部や、絶えず黄い車臺の流れを運ぶ電車の線路など設
 備が整つてゐる。大通り筋には、門から支關までの道路以外は踏みつけ

此の譯書の成るに就て、恩師
 坪内博士は實に叮嚀懇切を
 極めたる注意と指導とを賜
 はりたり。茲に特記して、感
 謝の意を表す。

河竹繁俊謹誌

てない草の生へた前庭を往來中に作つてあるといふ贅澤がやつてある。何哩も々々續いてゐる不體裁な煉瓦の家、黒い鐵柵、鋪石、石板葺きの屋根、それから大方は他人の用向で氣の無さうにとぼんと歩いてゐる、場所馴れのした立派ではないが耻かしからぬ風をした人とか、見すばらしい酷い態をした人——と言つたやうなものが、飽迄も單調で不愉快に感じさせる。元氣とか熱心とかいふものは、僅かにロンドン人固有の慈心と商業的活動に表はれてゐるだけである。巡查も禮拜堂も數が多いだけに單調を破るに到らない。太陽が快く輝いてゐる。霧は少しもないが煙は可なりひどく、手でも顔でもさしては煉瓦でも漆喰でも、到底奇麗にはなつてゐないと言つてロンドン人を困らせる程でもない。

此の無趣味な砂漠中にも膏地がある。ハックニー通りの出端は二百十七エーカーの公園で、鐵柵ではなく木の杭に圍まれて、中には芝生や樹木や水浴の出来る池とか、倫敦名物カーベット式造庭術の傑作たる花壇と

か、又砂場などがある。此の砂場はもと子供の遊び場に海岸から輸入して來たものだが、公園に飼つてあるキンカスランド、ハックニー、ホックストン産の美しい動物を惱ます害蟲の風竟の棲家になつたので、やがて寄付くものが無くなつてしまつた。それから音楽堂があり、宗教演説、宗教反對演説、政談演説などをやる爲めの演壇、クリケットの運動場、體育館、古風な石造の涼亭などが人の眼を惹く。此の公園では眺望が木や緑の小山で遮られてゐる所へ行くとき心持のよい場所である。所が眼界が開けて灰色の板塀煉瓦漆喰屋上の看板林立する煙突とその煙などを見渡せる所へ來ると一八九四年に於ては如何にも殺風景な汚ない所だと思はせるのである。

此のワイクトリア公園の最上の眺望を領してゐるのは、聖ドミニックの牧師館の表窓で、そこからは煉瓦の影すらも見えない。此の牧師館は一方だけ家續きになつてゐて、前には庭があり玄関がある。訪問客は階

段を上つて玄關に通り、出入商人や家族の者は階段の下の入口から地下室へ通るのである。地下室は前が朝食の部屋で三食ともに此處で済ます、それから後が臺所になつてゐる。階段を上がると玄關の廊下續きに客間がある。その大きな硝子窓から公園が見わたされる。此の室こそは牧師シエームス、モーヴァー、モーレル氏の執務室で、子供や食事の爲めに邪覓をされない唯一の居間なのである。彼は窓に向けて据えられた長卓子の一方に、磨疊な背の圓い回転椅子に腰かけて居るのである。左手へ向けば肩越に公園が眺められて目を慰めるに足る。卓子の一方の端に、それと接して小さな前の、牛分程の大きさの卓子があつて、上にはタイプライターがある。彼のタイプヒストは窓を背にし機械に向つて座つてゐる。大卓子には小冊子、雑誌、手紙抽出の組重、事務日誌、郵便量計などが取り亂されてゐる。來客の椅子が、中央に主人の方を向いて置かれてある。手の届くところに文房具箱と榨入の寫眞がある。彼の背後の

壁は書棚になつてゐる。目敏い人が見たらば、モーリスの神學論集、ブラウニング全集とて、牧師としての彼の良心論と神學を測る事が出来るし、又表紙の黄な「進歩と貧窮」や、英國社會主義論集、『ジョン・ボールの夢』、マルクスの『資本論』、其他五六種の社會主義に關する名著によつて、社會改良家としての彼の意見を窺知することが出来るのである。彼と對して室の向側、タイプライターに近く屏がある。ずつと下つて暖爐の向ひには、裝飾を兼ねた物入臺があつて上に本箱が載つてゐる。此の傍に長椅子がある。火は盛んに燃えてをり、爐の側には掛心地の好きさうな脇掛椅子と黒漆のかゝつた花模様の石炭入れが置いてある。それに對つて小形の子供椅子。假漆をかけた木製のマントルピースにきちんとした棚が設けられ、いくつかの小さな鏡が嵌込になつてゐる。てつきり結婚當時の贈物と頼まれる革箱に入つた旅行用時計も置いてある。それから壁上高く掛けてあるチ、アンの「ヴァーノン」昇天中の主な畫像の複製が

著しく目に付く。要するに此の室は氣の利いた女主人の管理する室と見受けられる。成程卓子の上だけは不精な男の手で取散らされてゐるが、他は整理が行届いてゐる。裝飾といふ點からいふと、家具は概ね場末の山氣澤山の家具商などが、盛んに廣告して賣付ける「客間用裝飾品」のお里を露はしてゐるが、不用なものや虚飾的なものはない。壁紙も壁板もくすんだ色であるだけに、大きい陽氣な窓や公園の景色が引立つ。

六
牧師ジエームス、モーラー氏は、イギリス教會の基督教社會主義者であり、又聖マシウ協會及基督教社會團の利ける者である。元氣な快活な人氣のある四十男で、強健な客貌の立派な氣力に満ちた、愉快さうなしんみりとした、思慮のある舉止。健かな氣取らない音聲、老練な辯士に見る明晰な底力のある發音で物を言ふ。表情もなか／＼豊富で且つ自在である。確かに第一流の牧師である、誰にでも言はんと欲する事を陳べることも、出來敵愾心を起させないで説法することが出來、又彼等を

おとしめずして權威を示す事も出来る。且つ折々當然の事のやうにして彼等の身事に干渉しうる人格を備へてゐる。彼の熱心と同情とは嘗て一瞬間も潤れたことはない。彼は尙十分食ひ且つ眠り、以つて毎日の戦闘に十二分の勝利を收むる程の健康體である。而もその實亦大きな赤兒で、無理もなく自分の力量に己惚れてゐて、我知らず自分に對して大満足なのである。いかにも大丈夫さうな血色、眉毛は少しぶつきらぼうだが額付は立派で、目はばつちりとして活氣を帯びてゐる。口元は餘りよくもないが引緊つてゐる。鼻は大きくつて、劇の白に長じた人のやうに敏活な擴つた鼻孔を有してゐるが、然し顔全體同様、機慧を示す造作ではない。

七
タイピストのプロサーピン、ガーネット女は、三十格好の中等社會の下流に屬する活潑な、小柄な女である。黒の緬毛製の袴袖の寬い上着といふ、小ざつぱりとした安つばい服装である。物言ひは稍無作法で、口早で總

Shaw

じて舉止は餘り丁寧な方ではないが、神經質で情がある。牧師は朝の最後の手紙を読んでゐるが、プロサーピンは忙しげにタイプライターを打つてゐる。牧師は手紙を読んで、その内容を一種滑稽な失望の呻き聲で洩す。

プロサー 又御講演？

牧師 あゝ。ホックストンの自由團體が日曜の朝演説して呉れと言ふんだ。(彼が日曜といふ言葉に力を入れたのは、此の用向の不條理な點だと思つたからで)何だね、あの團體は？

プロサー 共産世義的無政府黨でせう。

牧師 いかにも無政府黨らしいねえ、日曜にや牧師は招べないつて事を知らないなんざあ！私の話が聞きたけりや教會へ來いつて下さい。そこに日誌がありますか。

プロサー (日誌を取つて) はい。

牧師 次の月曜には何か講話する筈でしたか？

プロサー (日誌を繰つて) タワー・ハムレッツの急進俱樂部です。

牧師 ふんでは木曜日？

プロサー 英國土地復舊同志會です。

牧師 次は？

プロサー 月曜日がセント・マシウ協會。木曜日は獨立労働會のグリーンニッチ支部。月曜が社會民主聯合會のマイル、エンド支部。木曜日は最初の堅信禮會合——(ぢれ込んで) あゝ、いつそいらつしやる事が出

來ないと言つてやりませう。たかゞ五六人の無學な高慢な小商人の寄合ですよ、お金つたら皆で五志もむづかしいやうな。

牧師 (興じて) あゝ、然し彼らは私の近しい親類なんだよ、ガーネットさん。

プロサー (目を丸くして) 親類ですつて? あなたの。

牧師 さうです。私達は同じ父を持つてゐます——同じ天の父を。

プロサー (安心して) おや、それだけなんですか?

牧師 (かう巧く言表す人にとつては一種の楽しみかとも思はれる悲衷の調子で) あゝ、あなたはそれを信じないね。誰しもそれを口にするが唯

一人それを信じない——唯一人。(快活に、前の話に戻つて) おい——

! ではその小商人達の日は都合が出来ないのかね? 二十五日

頃はどうかだね、一昨日までは空いてゐたつが。

プロサー (日誌を繰つて) 塞がつてます——フエビアン協會。

牧師 フエビアン協會の奴め! 二十八日も駄目かい?

プロサー 市の午餐會です。發起者團から招待が参つてゐます。

牧師 よろしい。ぢやそれを止めてホックストンの自由團の方にしな

せう。(女は黙つて日取を記入したが、ホックストン無政府黨に對する

抑へきれない輕蔑は、顔中に漲つてゐる。牧師は郵便で届いた「教會改革者

の帶封を切り、スチユアート、ヘッドラム氏の社説と聖マシウ教會の會報とを

見る。茲へ牧師補のアレキサンダー、ミル氏が現はれたので、急に活氣づい

て来る。アレキサンダーは、一番近い大學殖民地からモレルが引きぬい

て来た若紳士で、そこへは大學で受けた教育を以てロンドンの貧民窟の爲

めに働かうとして、オックスフォードから来たのである。飽まで心立て

の善い事に熱中する、まだ乳臭のぬけない人物である。大して嫌味のある

行動もせぬが、唯一つ口を兩方から半インチ程づきちんと閉ぢて妙な調

子で物を言ふ癖と、ある母音をひどく詛る癖がある。殊にoをowといふ風

に發音する。これはオックスフォード仕込を鼻にかけて、俗物を嚇しつけ

る彼の慣用手段である。彼は飼犬のやうな忠實によつてモレル牧師の

信用を博したのである。牧師は此の時「教會改革者」から眼を放して優しげ

*the same father
in Heaven*

にミルを見上げて) やあ、レクシー、相變らず遅いね?

レクシー さうでせう。朝はどうかして早く起きようと思つてるんですが。

牧師 (おのが精力に勝誇るやうに) はつ! はつ! はつ! (ふつと氣を替へて) 目を醒し祈りせよ、レクシー、目を醒し祈りせよ。

レクシー そりや知つてます。併し(當意即妙に)寝てる時分に目を醒して祈るつてな困難ですなえ? ねさうぢやないかね、プロッシーさん?

プロサー (鋭く) 何卒ね、ガーネットとおつしやつて。

レクシー 失敬々々——ガーネットさん。

プロサー あなたは今日は獨で仕事をしなくちやならないんですよ。

レクシー 何故?

プロサー 何故でもさ。夕飯をあがる前に、それに相當するだけの仕事をなさるべきですよ、偶には私のやうに。さあ、ぶらくしてゐないでさ。あなたは半時間も前に巡回に出かけなくちやならなかつたんですよ。

レクシー (解し兼ねて) 先生、ありや眞面目なんですか。

牧師 (大機嫌で眼を躍らせながら) ああ。私は今日はぶらくして暮す積りだ。

レクシー え、あなたが! 暮しかたが分かりますまい。

牧師 (快活に) はつ! はつは! 暮しかた? 今日だけは全日自分勝手に使ふ——少くとも午前中は。妻が歸つて來るのだ、十一時四十五分の汽車で。

レクシー (愕いて) もうお歸りなんですか——子供衆を連れて? 月

末までは御滞在かと思つてましたに。

牧師 さうなんだがね、妻だけちつと二日間中歸りをするんです、ジミーのフランネル物を取りに来る序に、留守中どんなにしてゐるかを見ようと言ふのだ。

レクシー (心配さうに) ですけど先生、若しかジミーさんやフラッフィーさんがお罹りなすつたのが、猩紅熱だつたら、そんな事をなすつちや——

牧師 猩紅熱! ——馬鹿な、獨逸癩疾だよ。あれは私がバイクロフト町の學校から持つて來たのだ。牧師は醫者のやうなものだよ、君ちやうど兵士が彈丸に向ふやうに傳染病に向はなくちやならない。(立上りレクシーの肩を叩く) 君癩疾に罹つて見たまへ、さうすれば妻が介抱するよ、え、君、幸福だよ。

レクシー (不安げに微笑して) 私にはあなたが奥さんに關しておつし

やる事がどうもよく了解出來ないのです——

牧師 (やさしく) あゝ君結婚したまへ——結婚したまへ善良な婦人と、さうすれば了解が出來るよ。つまり吾々が此の地上に打立てんと試みてゐる天國で、最上のものを現世で味はふ事になるんだ。君の懶惰癖も直るよ。誠實なものは、苟も天國から享けた幸福に對して、これに報ゆる爲めに、獻身的の働を續けて、他の人々の幸福を圖らなければならぬと感ずる。吾々は恰も自ら生産しないで、富を消費するの權利がないと同様に、幸福を生産しないで、幸福を消費する權利はないのである。妻君を貰ひたまへ、僕のキャンデーのやうなのを。さうすれば君はいつも借越になる程豊かな幸福を享ける身の上になる。(彼は情をこめてレクシーの脊を叩き、室を去らうとする)

とレクシーが呼留める。

レクシー あちつと待つて下さい。忘れてました (牧師は立留まり、戸の引手を握つたまゝ、振向く) お鼻御がいらつしやる筈です。

牧師 (全く容子を變へて、戸を閉め、有難からぬ體に愕いて) バーダスさんが!

レクシー はい。公園でどなたかと議論をしてらつしやる所を通りかゝりましたら、これから行くからつて言傳を頼まれました。いへ

牧師 (信じ兼ねて) 然し、此處へは——殆ど何年か足踏みをしなかつたのだ。レクシー、眞實かい! 冗談ぢやあるまいね?

レクシー (眞面目に) いゝえ、全く。

牧師 (考へて) ふむ! 一度カンディダを見ておかないともう見忘れる時分だからな。(止むを得ないと言つた風をして出て行く。レクシー

は目を輝かして他愛もなく崇拜的に見送る。ガーネット女はレクシーを揺振つてやる事が出来ないで、その腹癢にタイプライターに當り散してゐる)。

レクシー 何といふ善良な人だらう! 實に愛を以て満たされた方だ! (彼は牧師のぬた席に居替り悠然と構へて巻煙草を取出す)。

プロサー (焦つたさうにタイプライターから手紙を外して、それを折りながら) 男ていものは妻君に惚れるのも好いけれど、鼻の下の長いの人に見られないやうにしなつくちやあね。

レクシー (愕いて) あゝ、プロクシーさん!

プロサー (忙しく立上つて文房具箱の所へ来て、封筒を出しそれに入れながら) 此處でもカンディダ、其處でもカンディダ、カンディダでなくつちや夜も明けない! (封筒を舐める) 傍の者こそ氣が變になつちまふ (ゴム

の着くやうに封筒を叩く。平々凡々な女をあんなに騒ぎ立て、さ、ちよつと姿い好いとか髪の毛が好いからと言つて。

レクシー (咎めるやうにおごそかに) ガーネットさん。私は奥さんを非常に美しいと思ふね。(寗真を取上げて見つめるそして尙一層語勢を強めて) 非常に美しい。どうも眼が好い!

プロサー 私の目と比べてこれん許りでも好いところはありやしない——ね! (彼は寗真を置き、彼の女を峻しく見詰める) でもつてあなたをだらしのない二流所の女だと思つてらつしやるんですね、確かに思つてらつしやいますよ。

レクシー (威儀を作つて立上り) とんだ事だ、神様のお造りになつたものをかりにもそんな風に考へるもんですか! (彼はしやちこばつて室を横切り女から遠かつて書棚の邊に行く)

プロサー (嘲笑的に) 有難う。それはまことに結構で嬉しうございませぬ。

レクシー (彼の女の僻み根性を悲しむやうに) 私はあなたが奥さんに對して、悪感情を持つてゐるとは思はなかつた。

プロサー (むくれて) 私なにも悪感情なんか持つてやしません。奥さんは實に美しい優しい氣立の方です。私は大好きです。どなたよりも私のはうがづつとよく奥さんを理解してゐます。(レクシーは悲しげに頭を振り、書棚に轉じ、何か讀物を捜してゐる。プロサーは酷くぶんくして追及する) 嘘だとおつしやるんですか? (レクシーは向返つて顔を見合はせる。女は大した権幕で喰てかゝる) あなた、私が妬むと思つてらしやるのね? まあ、なんて明察力のある方なんでしょうねえ、レクシー、ミルさんは! あなたは女の弱點をようく御存じ

なのでせう？ 私達のやうに單純な感情ばかりではなくて、微妙な、鋭い洞察力を持つてらっしゃる男はえらいもんですわね。そして私達が、あなたがたの惚れた慾目といふのに同感しないといふと、それは、女はお互に妬み合つてるからだとおつしやるんですね！ (女は肩先をぐいとやつてレクシーをうつちやり、手を暖めるために暖爐の所に行く)。

レクシー あゝ、プロクシーさん。あなた方婦人達が、男子の弱點を知つてゐなされると同様に、男子の長所を了解してゐなすつたなら、婦人問題などは起らないでせうに。

プロクシー (手を火にかざして屈んだまゝ、肩越しに) あなたそれを何處で先生に聞きました？ 大丈夫、あなたが考へ出したのぢやない。さう旨く言へる筈がないから。

レクシー 其の通り。私は先生から教はつたのを耻とはしません、精神上の眞理は大抵先生の賜物なんですから。今のは先生が婦人同盟會の大會で言はれた事です。其の時の會員達は感服してゐなかつたやうですが、私は取るに足らぬ一介の男子ではあるが深く感服したのです。これには女が開口したゞらうと豫望して、彼は書棚に對ふ。

プロクシー (マントルピースの小さな鏡板で髪をなほしながら) どうかね、私に何かおつしやる時には、あなた御自身の考を有りの儘におつしやつて下さい、先生でなくね。先生の眞似をなさるのは見つともよいものぢやありません。

レクシー (窮所をやられて) 先生に倣はうとしてゐるんです、眞似るんぢやない。

プロクシー (また仕事に取掛らうとして席に戻りながら又面と向ひ) いゝ

え、眞似してゐらつしやるよ。何故あなたは蝙蝠傘を左の脇に挟んで歩くのです、誰でも手に持つてゐるぢやありませんか？ 何故あなたは歩く時に顎をしゃくり出すんです、目をきろつかせて忙しさにして！ 朝は九時半より早く起きた事のないあなたがさ！ 何故あなたは教會で Knowledge と言ふんです、平生の話の時には Knoll-
のと言ふ癖に！ ばつ！ 知らないと思つて！ (女はタイブライターの尻に尻を向けて、卓
んちやつた。此處に今日の日記がありますよ。 (女は彼に備忘録を渡す)。
レクシー (ひどく腹を立つて) 有難う。(彼はそれを取り女に背を向けて、卓
子のところで讀む。女は男の感情には委細構はずタイブライターの速記
の控へを寫し取る。茲へパーダス氏が案内なしに現はれる。小商人の身

の止むを得ざる貪慾が心の習ひとなつて、野卑にも下品にもなつたのが、過
食と商業上の成功とで、懶惰にも高慢ちきにもなつて、多少ゆりの付いた
六十男。鄙俗な、無學な、大酒飲みで、安労働者に對しては横柄な富豪や地位
のあるものに對しては丁寧な男、而もどちらに對する態度も、至極誠實なの
で、怨みもなければ妬みもないのである。彼には才能がないので、世間が賤
しい仕事の他には相應に金の取れる仕事を與へなかつたので、其の結果多
少卑賤な人間にもなつたのである。然し當人自身はそんな事には氣が付
かないで、其の商業上の成功は、個人として、暢氣な、なさけのある疵と言つ
てい、位陽氣な男が、商賣にかけては腕もあり、勤勉でもあり、目はしも利き
経験にも富んでゐるので、當然社會的に健全な勝利を得たのであると正直
に思つてゐる。軀附はすんぐり肥りて、平たい四角な顔の中央に豚のやう
な鼻がある。顎の下には光澤のない赤髯、その眞中に胡麻鹽がちよつぱり、
悲しさうな感情的な表情の、うるんだ碧い眼、此の眼の表情をば大仰に調子

をつけて物を言ふ癖で以て、苦もなく聲の上へ移るのである。

バーゲス (鬨の上)に立止まり、見まはし) モーレルさんは此處にゐると言つたつげが。

プロサー (立上り) お二階です。お呼び申しませう。

バーゲス (目を据えて不作法に眺めて) お前さんは前にゐたタイプラ

イターの姐さんぢやねえやうだね?

プロサー はあ。

バーゲス (頷いて) さうだ。若かつたよ、もつと。(ガーネット女は一睨み

睨んで、ぐつと氣取つて出て行く。彼は平氣で爐の前行つて、背中は火に

向け股をひろげながら) ミルさん、もう巡回にいきなさるんかね?

レクシー (紙片を疊んでポケットに入れながら) はい。直に出かけなく

つちやならないんです。

バーゲス (勿體らしく) ミルさん、おいらに構つておくんなさるな。今

日やつて来たのはね、おいらとモーレルさんとの内輪話なんだから。

レクシー (むつとして) バーゲスさん、お邪魔なんぞする氣は一向ない

んです。左様なら。

バーゲス (親方顔をして) お、左様なら。

レクシーが戸口に行きかけると、牧師が戻つて来る。

牧師 (レクシーに) 出かけるかい?

レクシー はい。

牧師 (深切げに肩を叩いて) 私の絹の手巾を首に巻いて行きたまへ。

寒い風だよ。行つて来たまへ。(レクシーはバーゲスの無作法をこれ

で大いに慰められ、氣を引立つて出て行く)。

バーゲス ジェームスさん、相變らずお弟子さんを甘やかしてゐるね。お

早う。おいらなんざ喰はして使つてる時分にや、分相應に扱かふんだ。

牧師（稍簡單に）私は弟子を助手とも友達とも思つて取扱ふんです。

私が門弟を働かせるやうに、あなたが店員や倉庫係りを使ふ事が出来たりや、忽ち金持になつちまふに相違ありません。いつもの椅子におかけなさい。

彼は不受相に命するが如く、爐に近い股掛椅子を指し、自分はやがて椅子から空椅子を取つて来て腰を下す、客とは大分離れて。

バーゲス（動かないで）以前の通りだね、ジェームスさん！

牧師 此の前おいでなすつた時には——三年許り前のやうですが——もう少し無遠慮におつしやつた。其の時には確か以前の通り大馬鹿者だね、ジェームスさんとお言ひなすつた。

バーゲス（宥めるやうに）む、言つたかも知れねえ。が（逆はないで、嫌よく）別に悪気があつたんぢやあねえ。坊さんでもものは、少し馬鹿でも濟むもんだ、職業柄其の方が似つこらしいやね。兎に角私が今日来たのは、古い争論を蒔き直しに来たんぢやねえ、濟んだ事は濟んだ事として、水に流してしまひてえのだ。（突然生真面目になつて、牧師の傍に寄り）ジェームスさん、お前三年前にやおいらを酷い目に遭はせたせ。お前のお蔭で請負がフイになつちまつた。でおいらが力を落した餘りに、つい自棄な口もたゝいたつけが、するとお前さんは娘まで親を親とも思はないやうにしてしまひなすつた。が、おいらあ今日は耶蘇信者の役割をしに来ました。（手を出して）ジェームスさん、私やお前さんを勘辨してあげる。

牧師（突立ちあがりて）無禮千萬な！

パーゲス (此の取扱ひで、落涙せん許りに心外に思ひ後退りして) それ坊
さんの口から出る言葉かね? — 而も口奇麗に言つてるお前さ
んの口から?

牧師 (激して) なるほど、僧侶の口にすべき言葉ではありません。言
ひ方が悪かつた。破廉耻な奴とでも言つた方が當然でしたらう。
ポーロでなくとも、苟も正しい僧侶なら、あなたに對してさうでせう。
あなたは私が忘れたと思つてますか、養育院へ衣類を納める請負仕
事に關するあなたの入札一件を?

パーゲス (公共心の發作ともいふべき表情で) おいらは納税者の爲めに
したのだ。おいらの一番安い入札だつたんだ。さうに違えな
らう?

牧師 左様一番安かつた其の筈さ、あなたはどの備主よりも安い賃銀

を拂つてゐたからです。—— 所謂飢渴賃銀—— 衣類を仕立てる女
子どもに取つては飢渴賃銀以上に悪い。あんな賃銀を貰つてゐて
は、身體と精神とを離さないやうにするためには、到底肉を賣る身に
ならざるを得なかつたでせう。(益々憤激して) あの女工どもは、私
の教會の管轄内の者でありました。私はあなたの入札の採用され
ないやうに、管理者達を耻しめてやりました。管理者共にさういふ
事をさせないやうに、納税者共をも耻しめてやりました。耻ぢな
つかのはあなた許りです。(猛烈に) 然るによくも圖々しくやつて
來て、勘辨するとは何です、剩へ娘の事を——

パーゲス まあさ、ジェームスさん、まあさく! 詰らねえ事に青筋を
立てなくとも、好いやね。悪かつたと言つてるだらうぢやねえか。
牧師 (ぶんく怒つて) え、悪かつたと? 更に聴きませんでした。

バーゲス 確かに言つたよ。悪かつたよ。さあ、濟まなかつたよ、いつかあんな手紙を出したのは。勘辨して下さい、ねえ？

牧師 (指を弾いて) そんな事はどうでも宜しい。賃金は上げましたか？

バーゲス (大得意で) うん、上げたよ。

牧師 (石像のヤリになつて) えん！

バーゲス (いやに優しく) 私や模範的の雇主になつちやつたんだ。今ぢやあ女工は使はねえ、皆々出しちやつて、仕事は機械で以てやつてる。男は一人として一時間六ペンス以上取らねえものはねえ腕のある奴あ組合並の賃銀を取らあ。(自慢さうに) さあ、これでもお前さん苦情があるかい！

牧師 (降参して) ほんたうですか！ 一人の罪ある人悔改めなば天に

於ける悦びは——(いかに悪かつたと思ふやうに機嫌よくバーゲスに近づき) バーゲスさん、まことに濟みませんでした、あなたに對して酷な考を持つてゐたのは。(手を握つて) ね、斯うなつたはうが心持がよいでせう？ 打明けておつしやいさ、幸福ですと。幸福のやうに見えますよ。

バーゲス (しほれて) でもあらうよ。さう見えりやさうなくちやなるまいよ。が兎に角おいらあ請負はして貰ふ事にしたよ、市會に。(荒々しく) 好い賃銀を拂はなけりやあ彼奴等あおいらに仕事をさせねえと言やがるんだから——おせつかいの馬鹿野郎共！

牧師 (すつかり失望して、手をだらりと下げ) ぢやあ、それであなたは賃銀を上げたのですか？ (不機嫌さうに腰を下す)。

バーゲス (手強くだんぐに聲を大きくし調子を高めつ) でなくつて、何

で上げるもんかね？ 賃銀を上げてやりやあ酒を飲んでぐでん々々になるのが落だ。(裁判官然と安樂椅子に掛けて) ジェームスさん、そりやお前さんに取つちや結構だらう。新聞に書立てられて、豪え人のやうに言はれるんだから。然しお前さんは金の使ひ途を知らねえ、労働者のぼつぼへ金を入れるのは不爲だといふ事を知らねえのだ、それよりか巧い使ひ途を知つてゐる手合の手に残しといはうがずつと増した。

牧師 (太く嘆息して冷やかな儀式張つた口調で) 一體今朝私に何の用があつておいでなすつたのです？ 娘に逢ふといふ積りだけでおいでになつたものとは思はれません。
パーゲス (頑固に) うんにや、それだけだよ。唯その娘に逢ふといふ積りだけで来たんだ。

牧師 (ちつと辛棒して) さうは思へません。

パーゲス (おどすやうに立上つて) ジェームス、モーレルさん。二度とさういふ事を言つて貰ひますまい。

牧師 (平氣で) いゝえ、何度でも言ひます、あなたがさうだと納得の行くまで言ひます。私にはさうは思へません。

パーゲス (苦りきつて) あゝよろしい、さう素氣なくする料簡なら、もう歸る事にしよう。(彼は不承々に戸口の方へ行く。牧師が平氣でゐるので躊躇し) 私はね、ジェームスさん、お前さんがそんなに頑固だとは思はねえだつた。(牧師はそれでも相手にしないので、又戸口のはうへ數歩行きかけたが又戻つて来て、涙聲で) 考は違つてゝも、元は折合つて行かれたもんだつたに。お前さんの仕打がどうしてさう變つたんだ？ ほんたうにおいらあ今日は全くの深切氣で来たんだ、現在の

娘の婿と仲違えしてゐるでもねえと思つて。よ、ジエームスさん、
信者になつて手を振らつしやい手を。(彼は感情的に牧師の肩に手を
載せる。)

牧師 (おもむろに見上げて) ねえ、パーゲスさん、あなたは此の家へ来て、あ
の請負が破談にならなかつた以前と同じやうに待遇されたいとお
思ひですか?

パーゲス さうよ、全く——眞實。

牧師 それぢやあ何故あなたはあの頃と同じやうになさらないんで
すか?

パーゲス (そつと手を放して) 同じやうにとは?

牧師 言ひませう。あなたはあの頃私を若輩な馬鹿者と思つてゐま
した。

パーゲス (媚びるやうに) うんにや、そんな事は——決してそんな——

牧師 (遮つて) いゝや、思つてましたよ。さうして私はまたあなたを悪
黨爺さんだと思ひ込んでゐました。

パーゲス (どうにかして牧師の此の甚しい自責を打消さうとして) とんだ
こつた、ジエームスさん。そりやあお前さんあんまり自分を悪く見て
ゐるといふもんだ。

牧師 いゝえ、全くさうなんです。然しそれはちつともお互の交際を
妨げなかつたんです。神があなたを私が言ふ悪黨にお造りなすつ
たのは、ちやうど私をあなたの言ふ馬鹿にお造りなすつたのと同じ
譯なんです。(此の意見を聴いて、パーゲスは彼の道徳觀の要石を抜取
られてしまつた思をなした。彼はなよ／＼となり、頼りなさ／＼に牧師を
見つめ、恰も床が急に傾き出したかのやうに、あわて、平均を取らうと片手

を差出す。牧師は同じ静かなる確信の調子で語を続ける。私はどちらの場合にも神のなされた事に就て異議を申立てようとは思ひませんで、あなたが自重心のある徹底した自信を持つた悪黨で、飽くまでも悪黨主義に忠實にして、それを自慢して正直にやつて來なすつた間は快く迎へたのです。然し(此處に到つて牧師の調子は熱烈になり、立上つて語勢を強めるために椅子の背を叩きながら)私は鼻聲を出して、やれ俺は模範的雇主になつたの、やれ全く改心したのと仰しやるのを聴きたくはありません。其の實、あなたは市會の請負がした**いばつかり**にちよつと**早變り**をして見せたに過ぎないので。彼は論旨を強めんがために、領いて相手を見下し、それから爐邊に近づき、よい鹽梅に火を脊にして優勢の位置を占め、身體を暖めながら續けるいゝえ、私はおのれ自身に忠實なるものを好みます、悪人でも。さあ〜帽子

を取つて出て行くとも又はそこに腰を下して私と親友になる爲めに、立派に悪黨らしい理窟を述べなされるとも、どちらかになさい。(感情が沈み果て、只もう惱まされたやうに、齒を出して苦笑してゐるパーゲスは此の具體的な提供によつてほつと息をついた。彼はちよつと考へて、やがて徐かにそしておとなしやかに、牧師が今まで掛けてゐた椅子に腰を下す、それでよろしい。さあ、言つて御覽なさい。)

パーゲス(思はず含み笑をして)はて、お前さんは全く變ちきりんな人だ、全くだ。だが(殆ど狂熱的に)氣に入つちまつたい、お前さんは。それによ、前にも言つたが、無論坊さんの言ふ事なんかまつ正直に聽いてゐるものはねえ、まつ正直に聽いた日にや世の中が立行きつこはねえんだ。だらうぢやねえか? (眞面目な議論に取掛るらしく先づ心を落附け、やがて牧師を見返り、問の抜けた眞面目な調子で) 所で、お互

にぎつくばらんと言ひなさるんだから、構はねえで言ふが、實はね、前にはお前をちつと足らねえ人だと思つてゐた。が今になつて思ふと、おいらのはうがちつと時世後れぢやなかつたか知らん。

牧師（得意に） あはっ！ やつと分かりましたね？

パーゲス（不祥らしげに） うん。思つてたより時世がずつと變つたんだ。五年前にや物の分かつた人なら、誰一人お前さんの考へなんざあ取上げようとは思はねえだつたらう。私はよくお前さんに説教なんぞさせておくと思つてたつけ。はアて、おいらはロンドンの監督さんに睨まれて何年間も無職でゐた坊さんを知つてゐらあ、その男は別にお前さんより坊さん臭くはなかつたんだが。が今ぢやあ、誰か、お前さんがつまりは監督になるんだらうてんで、千磅の賭をしてもおいら相手にやならねえ。（かを入れて） お前さんの連中は

大した勢になつたねえ、おいらにも分かるよ。いづれは、お前さんの口止めに何とかするやうになるだらう。つまりお前さんは感の好人だ。お前さんの選んだ職業はやつぱりお前さんのやうな人に取つちや損がいかねえんだね？

牧師（十分決心したらしく手を差出し）パーゲスさん、握手しませう。それが正直なお言葉です。私は監督に選ばれるとは思ひませんが、もし選ばれたら、宅へ参る仲師の大頭連を紹介しませう。

パーゲス（羊の如く白い齒を露はして立上り打解けて差出した手を握り） ジームスさん、冗談をお言ひなさる。これで仲直りが濟んだといふもんだね、さうだらう？

婦人の聲 さうだとおつしやいよ、あなた。

愕いて急に二人が振向くと、カンティダが丁度入つて来る。そして

description of female character

彼の女一流の樂しさうな母親式のやさしい表情で二人を眺める。し
つかりとした體格の營養の行届いた三十三歳の女、やがてはすつと世
帯じみるであらうとも思はれるが、今がちやうど女盛で若々しきと母
親らしきとの二重の美趣を有してゐる。此の女は、人は其の情を旨く
あやなしてゆけば、自由に扱へるものと思つて、それをおほつびらに本
能的に少しも遲疑しないで行ふたぐひの女である。て世間普通の美
人肌の女に似てゐる、一寸した自分勝手な目的の爲めに、女性的引力を
最も多く利用する事を怠らない。然しカンディダの沈靜な眉、凛々しい
眼付、格好の好い口元や顎が心の洪大と品性の威嚴とを現はしてゐて
愛嬌を造る技巧をも高尚にする。賢明な人の眼から觀たら、此の女と
彼の爐上のヴァージン像とは何人か、像と此女との間に精神的類似點
のあるのを認めて、特に掲げたのかと推測するであらう。而も此の女
やその夫にかりにもそんな考があらうとは思はれない。又此の夫婦

がチ、アンの畫に對してかりにも趣味などを持つてゐようとも思ひ
寄らないであらう。

今此の女は、ボンネット、マントル姿で、革紐で括つた毛布を傘の柄に差
通したのと、手靴と、一卷の畫入新聞とを持つて來た。

牧師 (自分の迂闊に愕いて) カンディダ! おや—— (彼は時計を出して
見て、其の遅いのに愕き) まあ、よく歸つたね! (急いで傍へ寄り、毛布を
取つてやる、いかにも濟まなかつたといふ様子で) 汽車まで迎ひに行く
積りであつたに、つい時間をおくらしちまつた。(ソファの上に毛布
を投げて) すつかり氣を取られてゐて—— (妻の傍に又戻つて)—— 忘
れてゐた——! (彼はいかににも後悔したといふ風で妻を抱く)。
パーダス (どう接待されるかと少々疑惑してきまり悪げに) カンディダ、ど
うだい。(カンディダは夫に抱かれたまゝで、父のはうへ頬を差出す、パーダ

スはそれに接吻する。 ジェームスさんとおいらは今ちやうど調停に
及んだ所だ——紳士的の調停に。 ねえ、ジェームスさん。

牧師 (語氣荒く) 其の調停のおかげだ。 馬鹿々々しい！ あなたのせ
いでカンディダを迎ひに行く事が出来なかつたのだ。(氣の毒さうに
しんみりと) お前、どうしました荷物。 嘸困つたらうねえ——？
カンディダ (彼を遮り、身を放して) そらく！ 私は一人ぢやなかつた
の。 ユージーンさんが来てね、始終一緒にゐましたの。

牧師 (悦んで) ユージーン！

カンディダ え、可哀さうに私の荷物で困つてますの。 行つて下さ
いな、ちよいと直に。 馬車代なんか拂はせちやいけないんですから。
(牧師急いで出て行く。カンディダは手籠を置き、マントルやボンネットを取
つて、その間も喋りながら) え、お父さん。 お家はお變りもありません

か？

バーゲス 家は詰らなくなつてしまつたよ、カンディ、お前がゐなくな
つてからといふもの。 偶にはやつて来て話でもして貰ひてえも
のだ。 誰だい、お前と一緒に来たユージーンつてな？

カンディダ お、ユージーンさんてな、やつぱりジェームスが掘りだし
て来た方なのよ。 此の六月エムバンクメントの上に寐てゐたのを
連れて来たんです。 あの新しい繪を御覽なすつて？ (とヴァージン
の像を指す)。 その方が下すつたのよ。

バーゲス (不審さうに) 呉れた！ お前其の——現在の親に向つて、そ
んなその！ 馬車の馬丁やそこいらの、ヘンバンクメントの上に寐
てるやうな奴が、お前そんな繪が買へるもんかい？ (酷しく嘘をつ
け、カンディ——) ハイ、チャーチの繪だ、ジェームスさんが自分で買

つたんだ。

カンディダ いゝえねえ。ユージーンさんは馬丁なんかぢやあないよ。

バーゲス ぢやあ何だ？ (皮肉に) 華族さんかね？

カンディダ (満足さうに頷いて) えゝ。伯父さんは華族さんでね——現

在伯爵なんですとさ。

バーゲス (餘りの事に信じ兼ねて) うそだ！

カンディダ ほんたう。ポケットに一週間拂ひの約束手形を五十五磅

持つてましたの、ジエームスがエムバンクメントで目つけた時に。で

お金は、一週間経つちまはなくては、手に入れる事が出来ないものと

ばかり思つてゐたんです。ほんとに可愛い坊ちやんなのよ！ 私

達大好きなの。

バーゲス (其の貴族を卑しめるやうな風をしてゐるものゝ眼を輝かして)

ふむ！ さうだらう。ちつと抜作かなんかでなけりやあ、ヴィクト
リア公園近所へ華族さんの甥御なんかお出掛になるもんけえ。(繪
をまた眺めて) 勿論おいら此の繪は好かねえが何しろ上物にや違え
ねえ、御前上等の美術品だ、そりやあ分かつてらあ。カンディダ、よしか
お前その人をおいらに紹介して呉れ。(心配さうに時計を見て) もう
二分しきあ居られねえ。

牧師はユージーンを連れて来る。バーゲスは熱心に潤んだ眼で以
てつくぐと見る。ユージーンの年は十八で、一種風變りのハニカミ
屋、かほそい、女らしい、優しい、子供のやうな聲の、始終物に追はれ責めら
れてゐるやうな表情の、怖れて尻込みするやうな青年である。即ち性
格がまだ十分に發達しきらない青年に見る、極めて敏活な、鋭利な感覺
に伴ふ、痛ましい感じ易さを示してゐるのである。みじめな程に優柔
不斷で、何處に立つて、どうしてよいかを知らないといふ風。彼はバー

四六
グスを怖がつてゐるのであるで、出来るなら直にも引込んでしまひたいと思つてゐるらしい。然しながら彼が斯く深刻に平々凡々の場合をも感ずるのは過度の神経作用の然らしむる所である。其の鼻孔や、口や、眼は激しい瘡癩持の氣儘者たる性質を表はしてゐるが、もう已に惻愍の皺を生じてゐる顔が其の性癖の保證を與へてゐる。彼は殆ど地上の者でないと思はれる程非凡なのであるで、散文的な人に取つては、其の地上的でない點に何か危険なところがあるやうに見え、詩人的な人に取つては、何處となく天使然たるところがあるやうに見える。彼の服装は無政府黨式である。古い青セルのジャケットのぼたんを外して、毛織のローン、テニスしやつの上に着てゐる。襟飾りの代りに絹の手巾を捲いて、づぼんはジャケツに對したのを穿き、襪色のゾック靴を穿いてゐる。此の服装で以て彼は荒野にも横はり、水をも徒渉したのである。而も嘗て刷毛をかけたといふ證據を認めない。

室に入つて、見知らぬ人を目見ると、立留まつて室の對ひ側を壁に添うてそつと歩く。

牧師（室に入ると）さあ、お入り。十五分や廿分はゐたつてもよからう、兎に角。此は私の男で、バーゲスさん——マーチバンクスさんです。マーチ（おじん／＼して書棚に背を凭せ）始めました。

バーゲス（大熱心でマーチバンクスのはうへ進む、その間に牧師とカンティダは爐邊で一緒にいる）。はい、始めまして、モーチバンクスさん。（無理に握手して）此のお天氣にいかゞでございますな？ ジェームスから馬鹿々々しい考なんぞ習つちやいけませんせ。

マーチ 馬鹿々々しい考？ あゝ、社會主義の事ですか？ いゝえ、ちつとも。

バーゲス それは結構。（又時計を出して見て）や、もう出かけなくつちや

ならねえ。よんどころないや。私の行くはうへいらつしやるんぢやないかね？

マーチ あなたはどちらへです？

マーチ ヴィクトリア公園停車場です。十二時廿五分發の市街行きがあるんでえす。

牧師 駄目です。ユージーン君は、私共と一緒に食事をするんだらう。

マーチ (心配氣に辨明らしく) いゝえ——私——あの——

マーチ はい——無理に勧めやしませんや。カンデーと一緒に食事をさつしやるがえ。其中にね、一晚私の俱樂部へやつて来ておくんなさい會食しませう。ノートン、フォルギットの公民會でがす。ねえ是非来ておくんなさい。

マーチ 有難う。ノートン、フォルゲートといふとどこです？——サ

レーのはうですか？ (マーチは探られたやうに感じて、たまらなく笑ひ出しながら早口に喋りかける)。

カンデー (とりなしに来て) お父さん、あなた早くいらしやらないと乗り遅れますよ。午後に戻つて来て、マーチバンクスさんに教へて上げなさい、俱樂部の在所を。

マーチ (興じ崩れて) サレーのはう——はつはつは！ そいつあいゝね。ノートン、フォルギットを知らねえ人に出つくはしたのは今日が始めてだ。(自分の懸がしさに耻ぢて) さやうなら、モーチバンクスさん。あなたのやうな上品な方は冗談を悪く取らつしやるやうな事はねえやね。(彼は再び彼の手を與へる)。

マーチ (それをぐつと握つて) 決して。

マーチ はいちやい、カンデー。後に又來るせ。左様なら、ジェームス

さん。

牧師 どうしてもお出かけですか？

パーダス 構ひつこなし。(大元氣で出て行く。)

牧師 いやお送りしよう。(追いて行く。ユージーンは氣遣はしげに其の後影を見つめる。パーダスが見えなくなるまで息を殺して。)

カンディダ (笑ひながら) え、ユージーンさん？ (愕いて振向き熱心にカンディダの方へ来たが、カンディダが面白さうにしてゐる顔を見て躊躇する。)

あなたどう思つて私の父を？

マーチ 私には——私にはまだよく分かりません。大變に好い老紳士のやうに思ひます。

カンディダ (軽く反語的に) あなた公民會で父と會食なさらうといふ積り？

マーチ (反語を眞面目に取つてみじめな聲で) はあ、それがあなたの御希望なら。

カンディダ (氣の毒げに) ほんとに、あなたは可愛い子ねえ、ユージーンさん、變り物だけれど。よしんばあなたが父を笑つたつて何とも思やしないんですが、よくしてやつて下さるから尙と好きになります。

マーチ 笑はなくちやいけなかつたんですか？ 何か妙な事をおつしやつたのは覺えてますが、知らない人に逢ふとどぎまぎして冗談を言はれても氣がつかしません。濟みませんでした。(ソーフアに掛る。膝の上に腕をつき、拳と拳で顚顚をおさへて、堪へ難い苦悶の表情を示る。)

カンディダ (優しくせりたてるやうに) あら、ちよいと！ 此の大きな赤兒ちやんが！ 今朝はいつもより出來が悪いのねえ。何故あなたは

あんなに憐いであたの馬車で来る途中？

マーチ 何でもなかつたんです。私は馬車屋にいくらやつたものだらうと考へてゐたんです。全く馬鹿なこつたと知つてますけれどほんとに怖いんです。さういふやうな事が——知らない人に係り合ふのが氣味が悪いのです。(口早に安心させるやうに) 然しもう好いんです。モレルさんが二志やりましたらね、馬車屋は大悦びで挨拶をしましたつけ。私は十志もやらうとしてゐたのでした。(カンダイダは心底からなかしさうに笑ふ。牧師が二三本の手紙と新聞紙とを持って戻る。正午頃で着いたのである。)

カンダイダ おゝあなた馬車屋に十志やらうとしてゐなすつたんですつて、此の人は——十志、三分間の馬車賃に！ まあ！

牧師 (卓子によりて、手紙に目を通しながら) 氣におかけなさるな、マーチ

バンクス。餘計に拂ふといふ本能は立派な美德です。なるだけ少くなく拂はうとする本能よりは優で、また稀な事です。

マーチ (辭きこんで) いゝえ、臆病なんです。無能なんです。奥さんのおつしやる通りです。

カンダイダ さうですとも (手靴を取上げて) そこで私は暫くあなたをジエームスに任せて行かなければなりません。あなたは詩人であらつしやるから、分かりますまい、女といふものは三週間も家をあけるとどんなに用があるものかを。妾の毛布を取つて頂戴。(ニュージーンは寝椅子の上の革紐で締めた毛布を取つて渡す。カンダイダは左の手に受ける。右手には靴を持ってゐる。) さあ外套を腕にかけて下さい。(その通りにする) さ、帽子を。(靴を持つ手に帽子を渡す) さ、どうぞ戸を開けて頂戴。(急いで先へ行つて戸を開ける) 有難う。(カンダイダは

出て行く。とマーチバンクスは戸を閉める。

牧師 (猶卓子によりて忙しげに) あなたは無論食事をして行くのでせうね、マーチバンクス。

マーチ (おどされたやうに) どうして (急にチラと牧師の顔を見たが、直に正面に見られるのを避けて、見え透いた曖昧な調子で) いゝえ、おられないんです。

牧師 いやだとおつしやるんですか？

マーチ (熱心に) いゝえ、そのまことに何ですけれど。有難うござんすけれど——けれども——その——けれども——

牧師 (きつとして、手紙を讀了り傍へ来て) けれども——その——けれども——つまり、居たけりや居たまへ。よもや他に用事があると言ふんぢやないでせう。きまりが悪けりや公園へでも行つて、

ぶらついて、詩でも作つて來たまへ、一時半まで。それからやつて來てしつかみ食つたらよからう。

マーチ 有難う、さうしたいんですけれども、然し、實際いけないんですよ。實は、奥さんがさうするなとおつしやつたんです。奥さんが、あなたは多分私に食事せいとおつしやらないだらう、よしおつしやつても、それは眞實さう望んでおつしやるんぢやないから、其の積りでゐろとおつしやつたんです。(悲しきうに) それから奥さんは、私に分かつたらうとおつしやつたんですが、ちつとも分らないんです。何卒此の事を私が話したと奥さんに言はないで下さい。

牧師 (からかふやうに) おゝ、それつきり？ 公園をぶらついて來たまへといふ私の注意が、其の難關を切抜ける役に立たうだらうぢやないか。

マーチ どうしてです。

牧師 (機嫌よげに笑ひ崩れて) 君はほんとに馬鹿——(然し此の騒がしい笑ひ聲は、ユージーンをも自分をも不快に感ぜしめたので急に自ら制し、優しい真面目な調子に戻つて) いや、こんな風に言ふんぢやなかつた。

ねえ、君私達のやうに幸福な結婚をしたものには、妻が歸つて来た場合に於て、一種神聖なものが存するのです。(マーチバックスは急に牧師の顔を見る、ほゞその言はんとする所を豫想して)。古い友達とか、真に高尚な同情のある者は、斯ういふ場合に邪魔にはならないのです。が偶然来た客は別です。(意味を了解するに連れてユージーンの面上には、狩り立てられ責め惱まされてゐるやうな表情が、急に鋭く、明らかに現はれる。牧師は自分の考に心を奪はれて、それを知らずに話をつゞける)。カンディダは、君が此處にゐて呉れないはうが、よいと私が思つてゐる。

やうに察したらしいが、それは思ひ違ひです。私は君が好きなんだよ。私のやうな妻を持つてゐるのは、どんなに幸福なものかといふ事を君に見せたいのだよ。

マーチ 幸福? — あなたの結婚が! さうお思ひですか! さう信じてゐるんですか!

牧師 (氣輕に) さうですとも。ラ、ロシュプーコーは、方便的の結婚はあつたが、楽しい結婚はないと言つてゐる。君は彼奴のやうな大法螺吹の腐つた皮肉屋の腹を看抜いてやる愉快を知らないんだ。はつ、はつは! さあ公園へ行つて詩を作つて來たまへ。一時半かつきりだよ、いゝかい。待つてはゐないよ。

マーチ (氣が狂つたやうに) あの、ちよつと、お待ちなさるな。いや、く打明けておかなけりやならない事がある。

牧師 (解し兼ねて) え? 打明ける何を?

マーチ あなたにお話しなくちやなりません。私達二人の間に話を附けておかなければならない事があるんです。

牧師 (氣まぐれにちよつと時計を見ても) 今?

マーチ (熱して) 今です。あなたが此の部屋にゐらつしやる間に。(數歩引下つて恰も牧師が戸口へ行くのを遮るかの如くにして立つ)

牧師 (動かずに何か眞面目な話があるのだなと思つたらしく、嚴格に) 私は出て行きやしないよ、君が出て行くかと思つてゐた。(ユー・ジョンは、牧師の斷乎たる口調に挫かれ、怒り悶えながら脊を向ける。牧師は進み寄つて、振放さうとするにも構はず、強く而も優しくマーチバンクスの肩に手を置く)。さあ君ちつと腰をかけて、何だかその事を話したまへ、い、かい私達は友達だ、どんな事を言はうとも深切に堪忍し合ふ仲だ、決

して遠慮する必要はないよ。

マーチ (身體を巻きつけるやうにして) お、私は血迷ふてゐるのぢやない、私は唯(一生懸命に手で顔を掩つて) 恐ろしいばかりだ。(やがて手を下し、牧師のはうへ猛然と顔を突きだし、威嚇するやうに言ひ進む) あなたは今にこれが深切に堪忍のなる事かどうかをお知りなさるでせう。(牧師は岩石のやうに泰然として物やはらかに見下してゐる) そんな得意さうな顔をして私を見ないで下さい。あなたは、私よりも強いと思つてらつしやるんでせうが、かりにもあなたに情があるんなら私はあなたにあつと言はせて見せる。

牧師 (強い自信を以て) あつと言はせるつて! お言ひよ。

マーチ まづ —
牧師 まづ?

マーチ 私はあなたの奥さんを愛してゐます。

牧師は思はずきつとして、暫時は全く呆れてマーチパンクスを見つめてゐたが、耐へかけて大笑ひに笑ふ。ユージーンは不意打を喰つて驚いたが、へこみはしないで直に憤然として輕侮の態度を取る。

牧師 (笑ひきつてしまふ爲めに腰を下し) そりや君君が愛する筈さ。妻には誰だつて愛せざるを得ないのだ。至極けつこう。だがね(思ひだしたやうにマーチパンクスを見上げて) ユージーン君の場合は之を口にするに足ると思ふかね? 君はまだ十代だ、あれは卅歳を越してゐる。小猫の戀愛然としてゐやあしないかね?

マーチ (躍起となつて) 奥さんのことを敢てそんな風に言ふんですか! 奥さんのインスパイヤする愛をそんな風に考へてゐるんですか! それは奥さんに對して侮辱です!

牧師 (急に立上り、調子を替へて) 妻に對して! ユージーン、氣をお附けなさい。今までは堪忍してゐた。飽くまでも堪忍する積りだが、容赦のならん事もある。君を子供と見做して容赦せねばならんやうになさるな。成人におんななさい。

マーチ (何物かを後ろに拂ひのけるやうな手眞似をして) あゝ、もうそんな拵らへ聲は止して下さい。私は慄とする。奥さんがあなたの其の自惚を満足せしむるために、此の長い年月自分勝手な盲目同様なあなたの犠牲になつて、どれ位あぢきない辛い目を見たのかと思ふと——あなたの! (と牧師のはうへ向き) 奥さんとは——只一つの考も——一つの感じも共にしてゐないあなたの。

牧師 (哲學者然と) 可なりよく辛棒したらしい。(マーチパンクスの顔をきつと見つめて) ユージーン、君は自分の愚を見せびらかしてゐるん

だよ、大馬鹿者たる事を。これは君の爲めに薬になるやうにとの苦言だ。

マーチ では、あなたは私がそれに気が付かないと思つてゐるんですか？ あなたは人が自分を愚にしてやつてゐる事は其の利口ぶつてやつてゐる事に比べて真でない、實でないとも思つてゐるんですか？ (見つめてゐた牧師の目が此の時始めて動揺する。彼は本能的に顔をそむけ、耳を傾けつゝ、立つてゐる愕かされて考へ込んで) いゝえ、却てそのほうが眞實なんです。あなたは私に對しては落着いて分別も明らかで穩當にもしておいでなさる。といふのは私があなたの奥さんに溺れて馬鹿になつてゐると知つておいでなさるからです。ちやうど、今方此處にゐたあの老爺が、あなたが社會主義に溺れて馬鹿になつてゐるのを知つてゐるから、あなたを上から見下して

ゐたのと同じです。(牧師の疑惑が著しく目立ち始める。ユージーンは其の虚につけいって、激しく詰問する)。これでもあなたの間違つてゐる證據になりませんか？ それともあなたが自分免許でえらがつてゐるのが私の間違つてゐる證據になりますか？

牧師 (嚴として立てるユージーンに) マーチ、パンクス、それは悪魔が君に言はせるんだ。人の自信を動揺させるのは容易です、極めて容易です。そこへ附けこんで人の精神を打破するといふのは悪魔の所爲だ。注意しておやりなさい、注意して。

マーチ (残忍に) 知つてます。私は故意にしてゐるんです。あなたにあつと言はせると言つたぢやありませんか。

二人は暫時威嚇的に相對峙する。牧師はやがて其の威儀を回復して、牧師 (大入らしく優しう) ユージーン、お聞きなさい。早晚君が私同様

幸福な人になる事があるであらうと望みもする、信じもする。(ユー
シーンはその所謂幸福の價値を拒むらしく堪へ難げに憤激する。牧師は
深き侮辱を感じながら殊勝にも忍んで自ら制し極めて巧みなる演説口調
で酒々と續ける) 君が今に結婚すると全力を傾けて地球上のあらゆる
處を、君の家庭と同様に幸福ならしめようと努力する事になる。
即ち君は地上に天國を作る人の一人にもなられるでもあらう、さう
して——或は私は唯一個の卑しい日傭取たる場合に、君は社會の木
鐸でもあり棟梁でもあるといふやうな事が出来るかも知れない。
何となれば君は年こそ若い私が私などには到底望まれない末頼もし
い高尚な力量がほの見えてゐる。私がそれを観得ないと思ひたま
ふな。私はよく知つてゐる、人の聖き精神——即ち人に宿れる神——
が最も神々しく見えるのは詩人である事をよく知つてゐます。

そこに心附いたなら、君は戦慄せざるを得なからう、詩人たるの重大
な負擔と偉大なる賜とが君の身上に置かれてあることを思つたな
ら。

マーチ (少しも感じた様子なく、殘酷に子供らしく無細工に斷言するのが却
て手きびしく牧師の演説口調を打壞すに足る) それが爲めに私は少し
も戦慄しない。他人がそれを持つてゐないから、戦慄するんです。

牧師 (自分の感情の純なると、ユーシーンの頑固なものとに刺激されて、演説口
調に二倍の力を籠めて) それなら、それを世人なり——私なりの心に
——消さないやうに燃えた、せるやうに努力すべきではないか。
將來に於て——君が私のやうに幸福になつた時分に——私は君の
眞の教友になりませう。私は君に信じさせませう、神は樂園たり得
る世界を吾々に與へたのであるが吾々が愚なために、只それがため

に樂園パラダイスにならないのだといふ事を。私は君に信じさせませう、君の
する事ことなす事は、衆人しゆじんの——最も卑賤ひせんなものまでが——早晚そうばん蒞かり
り得るところの大なる收穫しゆくわくに對して幸福かうふくの種子たねを蒔まいてゐなさる
といふ事を。而して最後に、而も決して輕かろからぬ事は、私は君の妻君
が君を愛し、且つその家庭かていに於て幸福かうふくである事を君に信せしめるや
う助力じゆりよくしませう。吾々われはかういふ助力じゆりよくを要するものだ、吾々は常に
大いにそれを要するのである。若しも吾々が一度その理解りかい力りきに惱なや
みを生しやうせしめたならば、忽ちそこに夥おびたしい疑惑ぎわくが起る。家庭かていにゐて
も、陣營ちんえいにあるが如く、疑惑ぎわくの敵てきに包圍ほうゐされてゐるやうに感ずる。君
は私わたしに裏切りして敵てきを亂入らんにさせようといふのですか？
マーチ（あたりを見廻して） 奥おくさんに對して、いつも此處こゝで、そんな風ふうに
してゐるんですか？ 大きな精神せいしんを持つてゐる婦人ふじんが、眞まことと實じつと自由じゆう

とを要求してゐる婦人ふじんが、比喩ひよや説教せつけうや陳腐ちんぷな論法ろんぽうや空くうな修辭しゆじばか
りを喰くらはしめられてゐるんだ。あなたはお説教せつけうの才能さいのうさへあれば、
婦人ふじんの精神せいしんは生きてゆかれると思つてゐるんですか？
牧師ぼくし（ぎつくりして） マーチンバンクス。君は殆ど忍しのび難がたい事ことをおつ
しやる。私の才能さいのうも何等なんごうかの眞價まにかを有する點てんに於て、全然ぜんぜん君きみのと同
様ようです。即ち神聖しんせいな眞理まことを言表いひあらわはす天才てんさいである。
マーチ（猛烈に） いゝえ、あなたのは喋舌しゃべりの天才てんさいです。只ただそれに過ぎ
ない。あなたの能辯のうべんが眞理まことと關係かへんないのは、上手じやうずにオルガンを弾ひく
ことが眞理まことと無關係むくわんけいであると同じです。私はあなたの教會けい會に行つ
た事ことはないが、政談演説せいだんえんせつは傍聽ぼうていしました。そしてあなたが所謂いはず聴衆ていしゆ
を沸騰ふつとうせしめて、まるで酔つたやうに感動かんどさせてゐるのを見た事ことがあ
ります。すると、彼等かれらの妻君達さいきんたちはそれを見て、ま、何なんといふ馬鹿ばかだらう

と、夫共の顔を見てゐたのです。然しこれは今に始まつた事ではない、バイブルにあります。狂熱してゐる最中のダビデ王はきつとあなたのやうだつたでせう。(言葉で相手を貫くやうに)『されど、彼の妻は心に彼を藐視』んでゐたんです。

牧師 (憤然として) 出て行きなさい。これ? (威嚇的に) マーチバンクスのはうへ歩み寄る。

マーチ (寝椅子のはうへ尻込みしつゝ) 手を出しちやいけない。觸つちやいけない。(牧師はマーチバンクスの上衣の襟を手強く捉む。マーチバンクスはソファの上に縮みあがつて悲しげに叫ぶ) 待つて呉れ、モ—レル。お前がなぐるならおれは自殺する。(殆どヒステリー的に) 放して呉れ。手を放して呉れ。

牧師 (徐ろに力の入った賤蔑の調子で) ちっぽけな泣蟲の小童。(手を放

して) 出て行け驚いて目でも廻さない中に。

マーチ (ソファの上で喘ぎながらも牧師の手が収められたので、ほっと息をついて) お前を怖がつてるのぢやないや、怖がつてるのはお前だ。

牧師 (静かに見下して) さうかも知れない。

マーチ (疝癪聲で) さうだ、確かにさうだ。(牧師は賤蔑の表情であちらへ向く。ユージーンは手について立上り、その後から。お前はおれが野蠻な

取扱ひを受けるのを怖がるもんだから——つまり(涙聲で) おれは暴力でむかはれる時にや怒つてわめくより外に何もし得ないから

——お前のやうに馬車の頂上から重い靴を下す事が出来ないから——おれはお前の奥さんのために労働者のやうに喧嘩しえないから、おれはお前を怖がつてゐると思ふんだらうが、そりや大間違ひだ。おれはお前の所謂英國風の勇氣は持つてゐないかも知れないが、其

の代り英國風の臆病根性も持つちやゐない。おれは坊主の思想な
んかを怖いとは思はない。お前の思想と戦はう。おれは其の奴隷
となつてゐる奥さんを救はう。おれの思想で以て對抗して見せる。
お前がおれを追ひ出さうとするのは、お前の思想とおれのとおれを
んに判断させる勇氣がないからだ。お前は奥さんにおれを逢はせ
るのを恐れてゐる。(牧師は怒つて、急に振向く。マーチバックスは我知
らす恐れて戸口へ飛退く。) 手を出しちやいけないと言ふに。出て行
くよ。

牧師 (冷やかな輕蔑の口調で) お待ちなさい。手出しはしないから、怖
がらなくつても好い。妻が戻つて來れば、何故君が歸つたかと聞く
だらう。さうして、君が二度と此處の闕は跨がないといふ事を知れ
ば、其の理由を聞きたいと言ふだらう。ところで私は、君が破落戸同

様の振舞をしたと言つて、おれを悲しませたくはないんだ。

マーチ (更に憤激して、戻つて來て) さう言ひなさい——屹度さう言ひな
さい。若しほんとでない事をいふなら、あなたは嘘言者です。卑怯
者です。私の言つた通りをお話なさい。そしてどんなにあなた
が強くて、男らしく、そして獵犬が鼠を咬へて振るやうに私を振廻し
たか、又どんなに私がちいこまつて、おびえたか、又どんなにあなたが
私を泣蟲の小童と罵つて追出したか、のこらすお話なさい。あなた
が言はなきや、私が言ふ。手紙で奥さんに知らせる。

牧師 (呆れ果て) 何故それを彼女に知らせたいんだ？

マーチ (叙情詩的に狂喜して) 奥さんが私を了解して呉れるだらうから、
私が奥さんを了解してゐる事を知つて呉れるだらうから。若しも
あなたが奥さんに少しでも匿したり——私のやうに何もかも奥さ

んに打明けるだけの覺悟がなければ——奥さんは其の實私のもの
ですよ。終身もうあなたではないのですよ。左様なら。(行きか
ける)。

牧師 (おそろしく不安げに) お待ちなさい。私は妻に言ふまい。

マーチ (戸口で振向き) 嘘なり、事實なり、何か言はなきやなるまい、私が
行く以上は。

牧師 (ぐづくして) マーチパンクス、場合によつては——

マーチ (遮つて) 分かつてます——嘘を吐かうといふんだらう。それ
は無益です。左様なら、坊さん。

彼が、つひに戸口へ行くと、戸が開いて、カンティダが、空所着を着て入
つて来る。

カンティダ ユージーン、歸るの? (ちらく見て) あらまあ、ちよいと見

て御覽、そんな態で表街へ出ようつて! ほんとにあなたは詩人よ。
ジエームス、御覽なさいよ! (マーチパンクスの上衣を引張つて、前のは
うへ連れて来て、牧師に見せて) 此のカラーを御覽なさい! ま、ネク
タイを! 髪の毛をさ! 誰か、あなたの咽を締めてたのぢやな
いかと思はれてよ。(二人とも心の内密をけどられまいと用心する)。
これ! じつとしてゐらつしやい。(カラーをはめてやり、頸手巾を蝶
々結びに結んでやり、髪のもづれも直してやる) そらね! 大變きれい
になつてよ、かうなるといつそ食事をして行つたはうが好いでせう、
いけないとは言ひましたけれど。もう卅分で仕度が出来ますから
ね。(結んだ喋々の格好をちよつとなほしてやる) ユージーンは其の手に
接吻する。何をするんだね。

マーチ 私は勿論ゐたいのですが——あなたの夫の尊敬すべき紳士

が故障を言立さへなさらなければ。

カンティダ　ね、あなた、居ても宜うござんせう、おとなしくして、そして食卓の支度を手傳つて呉れ、ばね？（マーチバンクスは振向いて肩越しに、近答を挑むが如く、きつと牧師を見る。）

牧師（簡単に）　あゝ、好いとも。其のはうが好い。（卓子に近づき、そこにある書類を取って何か忙しげにもてなしてゐる。）

マーチ（カンティダに腕を差延べ）　さあ、支度にかゝりませう。（カンティダはその腕を受け、腕と腕と組んで二人一纏に戸口へ行く。出て行く時にマーチバンクスが言添える）　私は最も幸福な人間だ。

牧師　おれもさうだつた——一時間前は。

第二幕

同じ日。同じ室。午後遅く。客用椅子は卓子のところに直されてある。其の卓上は前よりもまた一層亂雑に思はれる。マーチバンクスが唯一人、ぶら／＼してゐて、タイプライターがどんな風に動くものかと弄つてゐる。と誰か戸口へ来たやうなので、悪い事でもした時のやうに窓へ行つて、外の景色に見とれてゐるやうにする。ガーネット女は、牧師に口述せられた文面を速記しておく控帳を持つて入来り、タイプライターに對つて寫し始めようとす。ユージンには眼を呉れない程忙しさう。すると不幸にも、其の最初に打つた鍵が戻らない。

プロサー　ちよつ！　マーチバンクスさん、あなた私のタイプライターにおせつかいをしましたね。知らない態をなすつたつて駄目ですよ。

マーチ (おづぐと) 濟みませんでしたたガーネットさん。ちよつとその動
かして見ようと思つたばかりです。

プロサー あなたは此の鍵を戻らないやうにしつちまひましたね。

マーチ (熱心に) 決して鍵にや觸りやしません。實際觸りやしません。

小さい車を廻して見たゞけです。(そわくしながら緩急齒車を指す)。

プロサー おゝ、やつと分りました。(器械をなほす、断えず口輕に喋りな

がら) きつとあなたはこれを手風琴のやうなものとと思ひなすつ

たんでせう。把手を廻しさへすりや直と好い文句の艶書が書ける

とでも、ね?

マーチ (真面目で) 私は器械で以て、随分艶書を書くことが出来るもの

だと思ひます。文句は大低同じなんでせう?

プロサー (多少怒氣を帯んで、かうした問答は冗談といふ場合の外は無作法

と思つてゐるので) そんなことは知りません。何故そんな事をおた
づねなさるんですか?

マーチ 失敬。私は賢い人は——事務が執れて、手紙の書けたりなん

かする人は——必ず戀愛事件を持つてゐるものかと思つたんです。

プロサー (憤然と立上つて) マーチバンクスさん! (きつと睨んで、そし

て威儀を繕ひ書棚のほうへ行く)。

マーチ (恐縮の體で近寄り) お氣に障つたんですか! あゝ言はなけ

りやよかつた、あなたの戀愛事件とさし合ひになるやうな事は。

プロサー (書棚から背い書物を引抜き、きつと見返つて) 私戀愛事件なん

ざ持つてやしません。何故私にそんな事をおつしやるんです?

マーチ (卒直に) ほんとに! おゝ、ぢや貴女は羞かしかつてゐるんだ、
私のやうに。さうでせう?

プロサー　いゝえ、決して羞かしがりなんでしょう。何を言つて
らんです？

マリーチ　（内証で言ふやうに）いゝえ、きつとさうです。世の中に戀愛事
件の少ないのは、それが爲めです。私達はすべて戀にあこがれて歩
きまはる。戀は人間本來の第一の要求です、人間の心情の第一の祈
願なんです。けれども私達は、その願を言出しえない、はにかみすぎ
るんです。（極めて熱心に）おゝ、ガーネットさん、あなた本當は何でせ
う、懼れずに、そして耻ぢずに――

プロサー　（侮辱されたやうに感じて）まあ、とんでもない！

マリーチ　（疝癢を起して）あゝ、私に對してそんな下らない事をおつしや
るな。欺されるもんですか？　駄目です。あなたは何故本心を私
に明かす事を恐れてるんです？　私は全くあなたと同じです。

プロサー　私と同じ！　そりや私へお世辭の積りですか、御自身へお
世辭の積りですか？　どちらです私には見當が付きませんが。（マ
イブライマーのはうへ行かうとする）

マリーチ　（意味ありげに止めて）しっ！　私は戀を捜し歩いてゐる。さう
して世間の人の胸に、それが量り知られない程藏してあるのを悟り
ました。けれども私がそれを貫はうとすると、此の恐ろしい羞耻根
性が私の喉を縊るんです。それで物が言へなくなつてしまふ、物が
言へない許りならまだ好いが、無意味な――馬鹿らしい嘘を言つて
しまふんです。それで私のおこがれてゐる愛が、犬や猫や手飼の小
鳥やに與へられてしまふんです。といふのは、あいつらはやつて來
て構はず下さいとねだるからです。（殆ど耳こすりのやうに）貫ひに
行くものなんです。幽霊と一つで、こつちから話しかけなけりや、向

うからは言はないんです。(平生の調子ではあるが、非常に憂鬱に)

世の中のありとあらゆる愛は皆言ひたい〜とあこがれてゐる。

唯言出しえないんです、羞かしいから！ 羞かしい！ 羞かしい！

それが世界の悲劇です。(深く歎息をして、客用椅子にかけ、両手で顔を

掩ふ)

プロサー (呆れ驚いたもの、抜かりなく、これは風變りの若い男と應對する場合に、此の女が主義として執るところの態度なのである) 非道な人間

はその羞かしいといふ心を、時々忘れつちまふんでせう。

マーチ (殆ど猛烈に突立上つて) 非道な人間といふのは愛のない人間

なのです。だから羞を知りません。彼等は愛を貰ひに行く力を持

つてゐます、それを必要としないからです。彼等は愛を與へようと

言出す力を持つてます、與へる何物をも持つてないからです。(椅子

にどつかと尻を下し、そして悲しげに言添える) けれども私達愛を持つ

てゐて、そして他人の愛とそれを一緒にしたい〜とあこがれてゐ

るものは、一言も口に出す事が出来ないので。(おづく) さうぢ

やありませんか？

プロサー (ちよいと、あなた。そんなお話は止めて下さらないと、私は此

の部屋を出て行きますよ、マーチバンクスさん。ほんとに出て行き

ますよ。不都合です。

タイプライターに戻つて、青い表紙の書物を開き、其の一節を寫し取ら

うとする。

マーチ (頼りなげに) 口にする價値のある事は皆不都合なんだ。(立上

り、力なげに室内をうろつきつゝ) 私にはあなたが分かりませんよ、ガー

ネットさん。どういふ事を話したら好いのです。

プロサー (叱るやうに) どうでも好いやうな事をお話しなさい。お天
氣の事でも。

マーチ あなたは子供が傍で飢えて泣き叫んでゐる時に、平氣でどう
でも好いやうな事を話さうと言ふのですか？

プロサー そりやしますまい。

マーチ さうでせう。私はどうでも好いやうな事を話しちやをられ
ない心がそれが爲めに泣き叫んでゐるのに。

プロサー ぢやあ黙つてらつしやい。

マーチ さうです、いつでもさうなるんです。私達は黙つちまふんで
す。然しそれであなたの心の叫びが止まりますか？——泣き叫ん
でるぢやありませんか、心があればさうなくちやならないんです。

プロサー (突然片手で胸を押へて立上り) お、仕事なんぞしようたつて

出来やしない、あなたがそんな事を言つてる間は。(小さな車手を離
れてソーファに掛る。鋭く感情を昂奮させられて) 私の心が叫ぼうと
叫ぶまいと、あなたに關した事ぢやありません。けれどもね私あな
たに言つておきたい事がありますよ。

マーチ 言ふにや及びません。さうなくちやならないと疾うに知つ
てます。

プロサー 然し聞いて下さい、若し私がさう言つた事があるとお言ひ
なさりや私は否認します。

マーチ (氣の毒さうに) 分かつてますよ。ではあなたは彼の人に言ひ
出す勇氣がないんですね？

プロサー (思はず跳び上つて) あの人！ 誰れ？

マーチ 誰でもさ。あなたの愛する人さ。誰でも好いのです。牧師

補のミルさん、かも知れない。

プロサー (輕蔑の態度で) ミルさん!!! 成程ねえ私が夢中になりさう

な好男子ね! 私まだしもあなたを取るわ、ミルさんよりは。

マリーチ (思はず後ろへ飛び退いて) いゝえ。失敬ですけれど、そんな事

は——私その——

プロサー (むつとして、爐の傍へ行きこちらへ脊を向けて立ちながら) おゝ、

怖がらなくても宜ござんすよ。あなたちやあないんですから。定

まつた一人の人ぢやないのよ。

マリーチ 知つてます。あなたは誰でも申込む人をば愛する事が出来

ると思つてゐらつしやるんでせう——

プロサー (憤激して) 誰でもですつて! 好い加減な事を。私を何だ

と思つてるんです?

マリーチ (がっかりして) 無効。あなたは私にほんとの返事をしない——

誰でも言ふやうな事しか言はない——ツォファアのはうへふらついで行つて詰らなさうに掛ける。

プロサー (おのが振舞を貴族に見下げられたものと解していらつ) あゝ、左様でいらつしやいますか。斬新な話が御入用なら、あちらへ行つて御自分とお話しなさるが宜ござんせう。

マリーチ さうするんです、詩人は總べて。彼は聲を出して自分自身に話をするんです。すると世間がそれを洩れ聞くのです。けれど時々、誰か他の人の話を聞かないと、耐らなく淋しくなるんです。

プロサー モーレルさんのいらつしやるまでお待ちなさい。あの方がお話なさるでせう。(マリーチバンクス身懐ひする) おゝ、何もそんな苦い顔をする必要はないぢやありませんか? あなたよりかすつ

と話が上手ですよ。(瘡癩を起して) あなたなんぞは喋り飛ばされ
つちまひますよ。(怒つて席に復らうとする、其の時マーチパングスは突
然思ひ當る所があつて、躍り立つて女を留める。)

マーチ あゝ分かつた!

プロサー (藏くなつて) 何が分かつたんです?

マーチ あなたの秘密です。實際ほんとうに女があんな人を愛す事が
出来るんですか?

プロサー (いかにも呆れ果てたといふ風に) えゝ!!

マーチ (熱情的に) いゝえ聞かして下さい。是非知りたいたいのです。知
らなくてはならないんです。私には了解が出来ない。あの人には
空な言葉と、敬虔な決心と、世間の人の所謂善の外に、何の取得もない
のです。あんな人が愛せられる筈はない。

プロサー (冷やかに體裁づくつて、話の腰を打らうとして) 何を言つてら

つしやるのか私には分かりませんよ。まるで呑込めません。

マーチ (激しく) あなたにや分かつてる。嘘をおつきなさい——

プロサー おゝ!

マーチ —— あなたにや解つてますよ、知つてなさるんです。(是非返

辭させようと決心して) 女があんな人を愛する事が出来るんですか

プロサー (眞正面にきつと見て) はい。(マーチパングスは兩手で顔を掩

ふ)。あなた、どうなすつたんです! (マーチパングスは手を下して女

を見る。女はその情なげな顔付に愕いて、急いで出来るだけ隔つた所へ離

れ、マーチパングスがしょんぼり立つて爐邊に行き、力なげに子供椅子に掛

けるまで、その顔をぢつと見つめてゐる。女が戸口に近づくと、それが開い

てパーケスが入来る。それを見て女は叫ぶ。お、嬉しい、誰か来てよ。
(安心して自分の卓子に椅子新らしい一枚の紙をタイプライターに挟む
時にパーケスはユージーンの後へ行く)。

パーケス (立派な客は優遇せねばならぬといふ風に) やれ、お前さまをこ
んねいにうつちやらかしておきやあがるんですな、モーチバンク
スさん。お話相手にと思つてね。(モーチバンクスは呆氣に取られてそ
の顔を見上げたが、先方は一向にお感じなし)。ジェームスは今食堂で以
て委員の者に逢つてますし、カンデーは二階で氣に入りのお針子を
教育してまさ。そばに座り込んで、『神々しい双生児』ていの、讀
みを教へてるんでさあ。(氣の毒さうに) お前さま、嘸寂しうござい
ましたらう、相手がタイプリストの女限りぢやあ。(安樂椅子を引きよ
せて腰を掛ける)。

プロサー (非常に腹を立て) あの方はまことにお仕合せよ、あなたはや
うな上品なお話相手が出来てね、兎に角結構です。(おちやくと激し
く音をたてタイプライティングを始める)。

パーケス (その傍若無人に愕いて) おい、おいらはお前に話をしてるん
ぢやないのだよ。

プロサー (鏡く、モーチバンクスに) こんな無作法な人を見た事があり
ますか、モーチバンクスさん?

パーケス (物體ぶつて殿格に) モーチバンクスさまは、旦那衆だ。お身
分柄をよう御存じだ、誰かとはお人が違ふわ。

プロサー (ぶりくして) けつこうよ、あなたも私も旦那衆でなく貴女
でなくつて。モーチバンクスさんがゐなけりやあ、随分つけくと
言つて上げたいんですよ。(器械からぐつと邪慳に手紙を引出したの

で、ペリくくと破れる。そらね！此の手紙をいけなくしちやつた——やり直さなくつちやならない。お、もう我慢が出来ない——此の馬鹿老爺！

パーゲス (立上つて、赫となつて息もしないで) ほうっ！馬鹿老爺だ、おれが！よくも言つたな！(喘ぎながら) よろしい！——よろしい。今に見ろ。思ひ知るがい。今におれが。

プロサー 私——

パーゲス (遮つて) うんにや、今の事は許さねえ。もう聴く耳は持たねえ。(プロサーは當付にボタンといふ音をさせて紙箱を置き更へ、侮蔑の態度で仕事に取掛る。モーチバックスさん、あんな女はうつちやつときなせへ。相手にやならねえ奴だ。(傲然と席に戻る。)

モーチ (氣の毒な程におどくして) こんな話は止めようぢやありません

んか。私は——私は、ガーネットさんが腹にあつて言ふとは思はれません。

プロサー (十分なる確信を以て) え、大ありですともね、まつたく。

パーゲス あんな女に係り合ふやうな下等な人間ぢやねえんだ。

電鈴が二度鳴る。

プロサー (控帳と書類をまとめ) 私よ。(急いで出て行く。)

パーゲス (後から呼びかけて) お、お前がゐないはうがけつこうだ。

(此の最後の言葉を言ひおふたので多少心持をなほしたが、猶一層巧い事を言はうと力めるもの、如く暫時女の後影を見送る。やがてぐたりとユーションの傍に掛けて、いかにも内密げに話しかける) さ、これで差向ひになつた。モーチバックスさま、他人にや滅多に言はねえやうな忠告を私お前さまにやしてえと思ひますあ。婿のジエームスとはお前

さまいつ頃から懇意になんすつたね？

マーチ 知りません。日なんざとても憶えてゐられないんです。二三ヶ月前からでせう。

パーゲス 何かあの男に變妙な事がありやしませんかね？

マーチ さうは思ひません。

パーゲス (聲に力をこめて) もうお前さまには氣が付かねえんだ。それが危険だ。あの何でがすよ、狂人でがすよ。

マーチ 狂人！

パーゲス 狂人でさあ、大きちげえでさあ。氣を付けて御覽なさりやあ、分りませう。

マーチ (不安げに) 然しそれは唯、あの人の考が――

パーゲス (食指で以てマーチバンクスの膝をつきなほ押付けてその注意を

促しながら) 私も初手はさう思つてをりやした。私も唯考が違つてゐる許りだと長いこと思つてやした。尤もね、ようござるか考といふ奴もね彼見ていに實地に行ふといふ段になると危険なことになるもんでさあ。然し私が言はうていのはそれちやあねえ。(誰もぬないのを確かめるやうに四邊を見廻し風んでマーチバンクスの耳に口をよせて) お前さまはどう思ひますかね、今朝方あれが私に……この部屋で言つたことを？

マーチ 何し？

パーゲス あれが言ふにはね――こりや實際の事だがね――あれが言ふには『私は馬鹿だ』とさう言つてね、『それからあなたは悪黨だ！』つて――平氣の平左で言ふんですが。私が悪黨だつて、ようがすか！ それからね、私と仲なほりをしたんです、悪黨でことがけつこう

なこつて、もめるやうにね。これでも正氣だと言ひなさるか？
牧師 (戸の外で、プロサーピんに聲を掛けながら戸を開ける) ガーネットさん住所と姓名とをみんな取つておきなさい。

プロサー (遠くて) はい、畏りました。

牧師 入来る。手に委員の書類を持って。

パーゲス (マーチバンクスだけに) やつて来ましたせ。よく氣をつけて御覽なさい。(一大事らしく立上りて) ジェームスさん甚だお氣の毒だが、苦情を言はんけりやならん事がある。實はそんな事は言ひたくねえんだが、どうも權利上、義務上、一應言はんけりやならんと思ふがね。

パーゲス モーチバンクスさんが證人だ、傍にゐなすつたんだから。
(甚だ嚴肅に) お前さんの使つてるあの若い女が、無法にも程があつた

もんだ、おれの事を馬鹿老爺と言つた。

牧師 (大いに面白がつて) お、そりやプロッシーの言ひさうな事だ。つけく言ふはうで、耐へちやあゐられないはうですから。困つた奴！ はつ！ はつは！

パーゲス (怒つて慄えながら) ぢやあお前さんは、あんな女の言ふ事なんかうつちやつとけといふのか？

牧師 ふつ、つまらない！ お話にならないぢやありませんか。うつちやつときなさい。(物入臺に近づきて、抽出の一つに書類を入れる)。

パーゲス お、うつちやつときますよ。私にあんな者は相手にしません。だがそれでいゝものかね？ それが聞きたいんだ。それでいゝものかね？

牧師 教會内の人に取つては問題かも知れないが、外部の人に取つて

は何でもない。あなたその爲めに何か害でも受けましたか、え？
要點はそこでせう？ 勿論そんな事は無い。もううつちやつとき
なさい。(話を止め、自分の席に就いて通信を認めにかゝる。)

バーゲス (マーチバンクスだけに) どうでがす、え？ 大のキ印だ。(卓
子の傍へ行き、空腹の人といふ嫌に、叮嚀な調子で) いつ食事だね、ジュー
ムス？

牧師 まで二時間ほど。

バーゲス (是非がないと諦めて悲しげに) 火にあたつて、讀むやうな何か
面白え本を貸して呉んな、後生だから。

牧師 どういふ書物善い本？

バーゲス (殆ど抗ふやうな叫び聲で) うんにやさ！ 何かその面白え奴
を、唯ちよつと時間潰しだあな。(牧師輸入新聞を卓上から取つて渡す。)

バーゲスはそれをうやくしく受取る。ありがてえ。(爐邊の大きな椅子
子に戻り、ゆつたりと掛けて讀みかける。)

牧師 (書きながら) カンディダが今にお話に参りませう、生徒を歸しま
したから。今ラムブの油注ぎをやつてゐます。

マーチ (愕然として狂氣的に突立上り) そんな事をしちや奥さんの手が
汚れる。モーレルさん、私は堪へられませんが、そりや耻辱です。私が
行つて注ぎませう。(戸口へ行きかける。)

牧師 止しになさい。(マーチバンクスは躊躇して立止まる。妻は君に、
私の靴を磨いて下さいといふのが落だよ、朝私の手数を省かせる爲
めに。)

バーゲス (むづかしい不慣れた顔をして) 下女がおいてないのかい、ジュー
ムス？

牧師 おいてあります。然し下女は奴隷と違ひます。いは此の家には召使が三人住んでゐるやうなものです。といふのは互に手傳ひ合ふのです。悪い思付ちやありません、ブロッシーと私とは食後に食器を洗ひながら、用務の相談をする事にしてゐます。皿洗ひも二人でやれば別に骨も拆れません。

マーチ (苦悶しつゝ) あなたは、女は皆ガーネットさんのやうに下等なものだと思つてゐるんですか？

バーガス (聲に力を入れ) その通りですな、マーチバンクスさん、いやまつたくその通り。下等だね、彼の女は。

牧師 (靜かに意味ありげに) マーチバンクスさん！

マーチ はあ。

牧師 あなたのお父さんは、何人程人をお使ひなさるね？

マーチ おゝ私知りません。(ソーフアへ不安さうに戻る、牧師の質問から出来るだけ遠ざからうとするやうに、そして石油の事を考へつゝ、心中に大苦悶をしてゐる)。

牧師 (非常に教格に) あなたが知らない程多勢なんですか！ (二層政

勢的に) 兎に角何かしなけりやならない下等な事があると、あなたは

電鈴を鳴らして、誰かにおつつけてしまふ、それがあなたの生活に於ける大きな事實の一つでせう、え？

マーチ おゝ私を苦しめないで下さい。一つの大きな現在の事實は、あなたの奥さんの指が石油に汚されつゝあるのに、あなたは此處に樂々と腰をかけて、お説教をしてゐるといふ事です——始終お説教をお説教を、口ばかりで！ 口ばかりで！ 口ばかりで！

バーガス (此の切込み方が酷く氣に入つたらしく) はつ、はつは！ こいつ

あ、好い！ (嬉しげに) ジェームス、参つたらう、ギャフンと。

此の時に、カンデイダ前垂姿勢格好よく、讀書用のラムプの心を切り油を充たし、火をつける計りにしたのを持って入来り、それをやがての用意に牧師へ近く卓上におく。

カンデイダ (鼻をちよつとピクとさせると同時に指の尖を拂つて) ユージンさん、あなたが此處にゐなされるやうだと、ラムプは皆あなたに任せますよ。

マーチ 私は、あなたが荒い仕事を皆私にさせて下さるといふ條件でなら、此處にゐませう。

カンデイダ 御深切さまねえ、然し私はあなたがどんな風になされるか、先づそれを見たいと思ひますの。(牧師に向ひて) あなた家を十分監督して下さいませんでしたね。

牧師 え、何か悪い事があるかい——手落でも——あつたかい？

カンデイダ (餘程困つたといふ顔をして) 私の一番大事なたわい刷毛を、

暖爐磨きに使つちまつたんですよ。(マーチバンクスは斷腸の悲鳴を洩す。パーゲスは愕然として四邊を見廻す。カンデイダはソーファに馳けよ) どうしたの、ユージン？ 気分が悪いの。

マーチ いゝえ、さうぢやありません。只恐怖です！ 恐怖を感じるのです！ 恐怖を！ (顔へ両手をあて、突伏す)。

パーゲス (驚いて) えつ！ 驚風に罹つた！ そりや悪いね、お前さまの年では。そ、く、く、直してしまはなくつちやいけねえ。

カンデイダ (安心して) 馬鹿な事をお父さん！ 病氣のぢやないんですよ、ね詩的のぢやね、ユージン？ (甘やかすやうに脊を叩く)。
パーゲス (耻ぢて) お、詩的のかい？ そりやどうも失禮だつた。(早)

合點を後悔して儘のはうへ向く。

カンディダ どうしたの、ユージーン？——たわし刷毛のこと？

(マーチ パンクス 身憚りする)。あれさ！ よござんすよ、もう。(マーチ
パンクスの傍に腰をかける)。ねえ私に贈つて下さいな、新しい立派な
のを、背が象牙で以て、眞珠貝の象眼になつてるのを、え？

マーチ (柔らかに、音楽的に、然し悲しくあこがれるやうに) いゝ、え、たわし
刷毛ではなく、船を上げませう——此の世界を離れて遠い、園へ
行く事の出来る小ちやい船を上げませう、その園では、床が大理石で、
雨が洗へば太陽が乾かす、又美しい緑や紫の敷物をば、南の風が吹い
て塵埃を拂ふ。でなくば馬車を上げませう、四輪立の！ 大空まで
運んで行く馬車を。空では星がラムプだから油を注ぐには及びま
せん。

牧師 (饜食に) さうしてそこでは、唯怠けてゐて、氣随氣儘に、何の役にも
立たない事をするより外には、仕事がないんだ。
カンディダ (聲を震はして) おゝ、あなた！ 皆壊しちまつちや酷いちや
ありませんか。

マーチ (激昂して) さうです、怠けてゐて、氣随氣儘に、何の役にも立たな
いことをしてゐるんです、それが即ち美しい、自由な、幸福な生活なん
です。誰だつてその愛する婦人に對しては、眞底からさういふ生活
をさせたいと思はないものがありますか？ それが私の理想です、
あなたのは何ですか？ 此の邊の醜惡な軒並に住んでゐる人達の
理想は何ですか？ お説教とたわし刷毛でせう——、あなたは説教
をする、奥さんはたわし刷毛で磨る。

カンディダ (巧みに) ユージーンさん、靴は宅のが磨くのですよ。そん

な事をおつしやつた罰に、明日の朝はあなたに磨かせますよ。

マーチ お、靴のことなんかおつしやるな！ あなたの足はその儘で美しいのです、山の上では。

カンディダ でも、場末を歩く時にや靴がなくちや美しかありませんわ。パーダス (侮辱されたやうに) おい、カンディー下卑た事を言ふな。

モーチ バンクスさんはそんな事あ聞馴れてゐなさらなから、又驚風を起さつしやらあ。詩的の奴をよ。

牧師は黙つてゐる。上へは通信のために忙し相に見えるが、實は自分が大丈夫と思つて突込んだ道徳的論鋒を、速かに且手早くユージーンが引外すので、此の新しいぞつとするやうな経験をどうした事かと疑ひ惑つてゐる。平生尊敬してゐないものが怖くなり始めた意識したのが、痛くその心を苦しめるのである。

ガーネット女が電報を以て入來る。

プロサー (電報を牧師に渡して) 返信料済みです。使が待つてます。

(器械のはうへ戻り、腰を下さんとする。カンディダに) 奥さん、マリヤが臺所でお待ち申してをります。(カンディダが立上る) 玉葱が参りました。

マーチ (身を慄はせて) 玉葱！

カンディダ はあ、玉葱よ。それも上等のちやなくつて、汚ない小ちやな赤いのよ。あなた刻むに手傳つて頂戴な。いらつしやい。

カンディダは、マーチバンクスの手頸を捕えて引張りつゝ走り出る。

パーダスは驚いて立上り呆氣に取られて、煙前の敷物の上に立つて彼等の後を見送る。

パーダス カンディーは華族の甥御さんをあんな風に扱つちあ濟まね

えわけだ。あんまりな事だ。なうジエームスさん、折々あんな手荒い事をされるんかね？

牧師 (電報を書きながら、短く) 知りませんよ。

バーゲス (感情的に) あの人の話はなかく面白えや。おいらはこれで文學で奴がらつびり好きだつたんだ。そこが又カンディーがおれに似て、よくお伽話をねだりくしたつけ。(二尺程の高さを手で示して) これん許しの小女の時分に。

牧師 (他に氣を取られてゐて) あ、成程。(電報を書き終り、吸取紙で押し、出て行く)

プロサー 御自身で嘶を作つてお話しなすつたんですか？

バーゲスは返事をせよともせず、いかにも傲然と見下したといふ態度をする。

プロサー (おだやかに) あなたにそんな事が出来るとは思つてゐませんでしたよ。序に御注意しておきませう、あなたはマーチバンクスさんが大層お氣に入つたやうですから。あの方はね、狂人ですよ。

バーゲス 狂人！ えっ！ あの人も!!

プロサー 大狂人ですよ。ほんたうの事ですよ、さつきあなたがいらつしやる前に、それはく私をびつくらさせたんです。あの人が変わな事を言ふのにお氣が付きませんか。

バーゲス それだ、詩的の驚風で奴は。勿論どうも様子が變だなと思つたことが、一度や二度はあつたが！ (戸口のはうへ室を横切りながら段々聲を高くする) はて、こりや大分けつこうな瘋癲病院だ。お前さんの外に介抱人があねえやうぢやあ！

プロサー (バーゲスが彼女の前を通りすぎる時) さうですよ、茲で、あなた

に何事か起らうものなら、それこそ大變でせうよ、ねえ！

パーゲス (高くとまつて) 私にや話をしかけて貰ひますまい。お前さんの主人に言ひなさい、庭内へ煙草吸ひに行つたと。

プロサー (嘲弄的に) おつ！

パーゲスが言ひ返す前に、牧師が歸つて来る。

パーゲス (感情的に) ジェームスさん、庭内を散歩して一服やつて来るから。

牧師 (無愛さうに) おゝ、けつこう、けつこう。(パーゲスは勞れたる老人といふ容子で、悲しげに出て行く。牧師は卓子に向つて立ち、書類を歸しながらプロサーピンに、半分は冗談のやうに半分は氣無しのやうにして言葉を續ける。) ねえ、プロッシーさん、何故あなたは親父に悪口を言ひましたかね？



プロサー (眞赤になり、急に牧師を見上げ、半分は怖ぢたやうに、半分はそりや酷いというやうな顔をして) 私——(と言ひかけてわつと泣き出す)。

牧師 (優しく快活に、卓子越しにプロサーピンのほうへ身を延して慰めつつ) おゝ、さあ、さあ！ 氣にするにや及ばないよ。あれは全く馬鹿老爺ですよ、ね？

聲を上げて綴り泣ながら、ぶつかるやうに戸口にかけてつけて消えてしまふ、どうんといふ音をさせて。牧師はこれまでだと言はんばかりに頭を振り、歎息し大儀さうに椅子に戻り、仕事をし始める。俄に年を取つて憐れたやうに見える。

カンティグが入つて来る。台所の用事を済まして前垂を外した。忽ち夫の情なげな顔を見付け、靜かに客用椅子に腰かけ、じつと夫を見下す。但し何にも言はない。

牧師 (顔を上げたが、仕事を直續けうるやうメンを棒げてゐて) え、ユージ

ーンは？

カンディダ 流し元で手を洗つてます——水道の口で。あの人は立派に料理が出来るやうになりますよ、マリヤさへ怖がらなきや。

牧師 (簡単に) はっ！ さうだらう。(又書き始める。)

カンディダ (近く寄り、書くのを止めさせるやうに手をそつと夫の上において) ちよいと、あなた。顔を見せて下さい。(牧師はペンを置いて言ふ通りになる。カンディダは夫を立上らせ、卓子から少し離れさせる。其の間始終批判的に顔を見入りながら) 明るいほうへ顔をお向けなさい。(窓のほうへ向かせて)。此の子はどこか悪いやうね。勉強をし過ぎやしないの？

牧 いつもと變りやしない。

カンディダ 大層蒼ざめて、灰色が、つて、雑がよつて年をとつてよ。(牧

師の憂鬱の色が深くなる。カンディダはわざと快活に切込む。此處へいらつしやい。(安樂椅子のほうへ引張つて行く) 今日だけの書物は十分しましたのよ。後はブロッシーに任しておいて、さ私とお話をなさいよ。

牧師 だつて——

カンディダ (困執して) いゝえ是非お話をして戴かなくちやなりません。(夫に腰を下させ、自分もその膝の脇敷物の上に座る) ね(夫の手を叩いて) もう顔の色がよくなつて來たわ。何故あなたはこんな勞れる過度な仕事をお止めなさらないの——毎晩々々講演やお話に出かけるのをさ？ 勿論あなたのおつしやる事は、眞實でもあり正當な事でもあるけれど、役には立ちませんよ。人はあなたのおつしやる事をこれん許りも心に留めやしないんです。勿論賛成はしてません。

然し賛成はしたからつて、何になりませう、あなたが背中を向けるや否や、あなたがお話しなすつた事と正反對の事をするんですもの。ね、聖ドミニックの私達の集會を御覽なさい！ 何故皆が毎日曜日にあなたの説教を聴きに來るのでせう？ その前六日の間は商賣や金儲けで眞黒になつてゐるんですから、七日目だけは休んで、一切そんな事は忘れたいと思ふからですよ。それで以て元氣を恢復し歸つて行つて、前よりもせつせと金儲けをしようと思ふからですよ！ あなたは確かにそれを奨励してゐるのですよ、それを止めさせるといふよりは。

牧師（精力をこめて嚴格に）カンディダ、お前は知つてゐる筈だ、私が屢その事は手酷く戒めてやつたことを。が然し、教會へ來るといふ事が唯、休息と氣散じのためであるならば、何故彼等は、何かもつと面白い

——もつと氣任せになる場所へ行かないのか？ もつと悪い場所へは行かないで、日曜日に聖ドミニック教會へ來るといふは、何かそこに善い意味がなくてはならない。

カンディダ いえ、もつと悪い場所は開いてないからです。よしんば開いてゐても、そこへ行くとところを見られたくないんです。それにあなた、あなたのお説教が大變に面白いから、あの人達には芝居を見てるやうなの。何故婦人の方があんなに熱心だと思つて？

牧師（不快の感に打たれて）カンディダ！

カンディダ お、私はよく知つてますよ。馬鹿な人。あなたは社會主義とあなたのお宗旨の力だと思つてゐらつしやるでせう。然し若しさうなら、あなたのお話しなする事を實行しさうなものです、只顔を見る爲めにのみ來ないで。みんなブロッシーと同じ病に罹つてる

んですよ。

牧師 プロッシーと同じ病！ カンデイダ、どういふ事だ、それは？

カンデイダ はい、プロッシーでも他の書記でも、あなたの手元にゐたのは皆さうです。プロッシーが町の店で貰つてゐたよりも、一週間に就て六志も安い給料で以て、洗ひ物をしたり、馬鈴薯の皮を剥いたり、其の他いろ／＼のいやな仕事を、何で甘んじてするでせう？ あなたを愛してゐるのですよ。それが理由です。皆あなたを愛してゐるんです。さうしてあなたは説教を愛してゐるのです、あんなに面白くなさる事が出来るものだから。そしてあなたはそれを以て、地上の天國に對する熱誠だとばかり思つてゐらつしやる。さうして世間もさう思つてゐます。ほんとに馬鹿よ、あなたは。

牧師 カンデイダ。それは何といふ恐ろしい——何といふ残酷な皮肉

Love
を
批
利

な言ひ方だ！ 冗談を言つてるのか？ 或は——もしや——嫉妬を起してゐるのぢやないか？

カンデイダ (妙に意味ありげに) え、少しは妬ましく思ひますの、時々。

牧師 (信じかねて) プロッシーを？

カンデイダ (笑ひながら) いゝえ、いゝえ。或人を妬むんぢやなくつてよ。ある人のためにです、愛さるべき筈で愛されない人の爲めに恨めしく思ふんです。

牧師 私の爲めに？

カンデイダ あなたの爲め！ 何の、あなたは可愛がられ過ぎ、崇拜され過ぎてゐるのよ。あなたは爲めにならない程愛されてゐてよ。いゝえ、ユージーンの事よ。

牧師 (ぎよつとして) ユージーンの事！

カンディダ あなたに許し愛が集まつて、あの人には少しも集らないと言ふのは不公平だと思ふわ、あの人はあなたよりもずつとその必要を感じてゐるんですのに。(牧師は我知らず癡學的にぶる／＼と慄ふ) どうしたの? 私の言つた事が氣に障つて?

牧師 (口早に) いゝえ、決して。(心配げな顔色できつと妻の顔を眺めて)

カンディダ 私がお前を十分に信じてゐる事は分つてゐるだらう?

カンディダ ま、そんなに自惚てゝ! それほどあなたは他人を魅する愛敬が御自分にあると思つて?

牧師 カンディダ。とんでもない事を言ひなさる。私は自分の愛敬なんか考へた事はない。私は唯お前の貞節——純潔といふ事のみを思つてゐた。それを私が信頼してゐるのだ。

カンディダ 何ていやな面白くもない事を、私に! おゝ、あなたは僧侶

ですよ——どこまでも僧侶ね!

牧師 (ぎつくり胸に應へ、顔をそむけて) さうユージーンが言つた。

カンディダ (面白げに、腕を夫の膝に戴せ、もたれかゝりながら) ユージーンの言ふ事はいつも本當よ。不思議な子ですよ。私段々好きになつたの、あちらへ行つてゐる間に。あなた知つてゝ? あの子は自分ではね、さうとはちつとも心付いてゐないんですけれど、一生懸命に私を愛しさうになつてますの。

牧師 (淺い顔をして) おゝ、自分ちや心附いてゐない?

カンディダ ちつとも。(夫の膝から腕を外し、考へ込んで向きなほり、兩手を膝にのせて、前よりも落着いた態度になつて) 早晩覺りませう——成長して經驗をつんだ時分には、あなたのやうに。さうして私がそれを感じてゐるに相違ないといふ事を覺るでせう。其の時になつ

て私をどう思ふでせうか知ら。

牧師 間違ひはあるまいね、カンディダ。私はないと思ひ、ないと信ずるが。

カンディダ (曖昧に) 場合によりけりですね。

牧師 (呆れ返り) よりけり!

カンディダ (ちつと夫を見て) はい。あの人の身のなりゆきに依るんですよ。(牧師はぼんやりと妻の顔を見てゐる) ね? 戀とは實際どんなものかを、彼の人かどうして習ふかに依るんです。といふのは、ど

ういふ女にそれを教はるかに依るんですよ。

牧師 (まるで呑込めかれて) なるほど。いゝや。何をお前言つてるのだから分らない。

カンディダ (説明するやうに) 若しあの人が善良な婦人から、それを教は

れば差支へはないの。あの人は私を赦して呉れるでせう。

牧師 赦す!

カンディダ けれど、悪い女からそれを教はつたとすれば、兎角男はさうですが、特に女を天使のやうに思つてゐる詩人がです! 戀を投り

出してしまつて、そして知らなかつた爲めに墮落した時に、始めて戀の價値が分かつたとしたら、どうでせう? その時あの人が私を赦

すでせうか?

牧師 赦すとは、何を?

カンディダ (夫がいかに呑込めが悪いと思つて、少し失望して、但しどこまでも優しく) 分らないの? (夫は首を振る。再び夫に向ひて、此の上

もない子に對するやうな親しみを以て説明する) といふのはね、私自身で教へてやらなかつたのを赦すでせうかと言ふのですよ。私があ

あなたの所謂貞節と——純潔を守つて、あの人を悪い女の手に打任してしまつた事を！ あゝ、ジエームス、あなたは殆ど理解してゐないのです。私の貞節と純潔に信頼するなんていふのは。私は悦んでそれを二つともあのユージーンにやつちまいたいのですよ、凍えて死にかゝつてる乞食にシヨールを呉れてやるやうに、若し外に私を取抑へるものがなかつたなら。あなたに對する私の戀に信頼なさい、ジエームス。ね、若しそれがなくなれば私はあなたのお説教なんかは殆ど何とも思つてやしませんよ——あなたが毎日自分をも他人をも欺してゐらつしやるその空な言葉、口先ばかりのお説教なんかは。
(立ちかける。)

牧師 彼の言つた通りだ！

カンディダ (立ちかけたが急に止して) え、誰の？

牧師 ユージーンのこと。

カンディダ (満足げに) あの人の言ふ事は、いつも正當よ。あなたを理解してゐるし、私を理解してゐるし、ブロッシーまで理解してゐます。それだのにあなたは、ジエームス！ あなたは何にも理解してゐないんですよ。(聲を出して笑つて、そして慰めるやうに接吻する。牧師は胸を刺されたやうに反跳して突立つ。)

牧師 どうしてそんな事をお前は爲うるんだ。私は——おゝ、カンディダ(苦痛を帯んだ聲で)接吻なんかされるよりは、おれは寧ろ心の臓へ鐵の釘を打込んで呉れたはうがよいと思ふのに。

カンディダ (愕いて立上り) あなた、どうしたの？

牧師 (狂氣のやうに制して) 觸つて呉れるな。

カンディダ (呆れ愕いて) あなた！

三三
茲へマーチパンクスが入つて来たので妨げられる。共に来たパー
クスは戸口に留まつて、目を据えて見てゐる。マーチパンクス二人の
間へ急ぎ進む。

マーチ どうなすつたんですか？

牧師 (まつきほになり、一生懸命に自ら制して) 何でもないので。只今
朝君の言つた事が正當か或はカンディダが氣が違つてゐるかといふ
だけです。

パーゲス (大聲に反抗して) えつ！ カンディーも狂人だ！ おゝ、さ、さ、
さ！ (と反抗的につぶやきながら、室を横切つて爐邊に行き、爐網でパイ
プの灰を叩き落す。牧師は半ば狂氣のやうになつて、顔を掩す爲めに前へ
屈んで、指を動かさぬやうに堅く組合はせてゐる)。

カンディダ (やつと安心して笑ひながら、牧師に) おゝ、あなた、びつくりな

すつたの！ それつきり？ ま、ほんとに存外平凡なものねえ、平凡
でないあなた方は？

パーゲス これ、何てえ口の利き方だ、カンディー。マーチパンクスさま
がどう思はつしやると思ふ？

カンディダ これはね、ジエームスが私に、人は自分の事を考へてゐるがい
ゝ、決して他人の思はくなんかを恐れていちぢけちぢけいけないと、教へた
から始まつたことなの。それは宅がする通りの事を私が考へてた
間は美しく行つてゐたのよ。けれども今！ 私がちつと宅とは違
つた考を持つたところが！——まあ御覽なさい！ ちよいと、まあ！
(大いに面白さうに牧師を指す、ユーシオンは、それを見るや否や片手で胸を
押へた、或苦痛に射通されたやうに。悲劇を目前に見る人の如くソーファ
にぐたりとなる)。

バーゲス (壇前の敷物の上にて) え、ジェームスさん、お前さん顔付がいつも程立派に見えねえせ。

牧師 (半ばは戯歌のやうな笑聲で) さうでもないでせう。皆さん、失禮しました。つい、うっかりお騒がせ申しました。(氣を落ちつけて) よろしい、よろしい! (卓子の前の席に戻り、きつと快活になつて書類の取調べに掛る)。

カンディダ (ソファに行き、マーチパンクスの傍に掛け、猶からかふやうな調子で) え、ユージョン。何故あなたはそんなにふさいであるの? 玉葱があなたを泣かしたの?

牧師は二人の行動に注目せざるを得ない。

マーチ (カンディダだけに) あなたは残酷です。私は残酷は嫌ひです。人が人を苦しめるのを見るのは怖い事です。

カンディダ (あてつこするやうに、春を撫でながら) 可愛さうに! 残酷

でしたか? 汚ない、小ちやい赤い玉葱をきざませたから?

マーチ (熱心に) おゝ、待つて、待つて下さい。私の事ぢやない。あなたはあの人を怖ろしい目にあはせましたね。私は自分の事のやうに感じます。勿論あなたが悪いのではないのです。——止むを得ない事なのです。けれども侮蔑しちやいけません。私はあなたがあの方を苦しめて笑つてゐらつしやるのを見ると身慄がします。

カンディダ (不審げに) 私がジェームスを苦しめるって! 馬鹿な事を。ま、あなた大袈裟な事を! 馬鹿な! (牧師のはうを見ると、牧師は急いで書物にかゝる、カンディダは其の傍へ行き、椅子の後ろに立ちもたれかゝりて) もうお止しなさいよ、あなた。来てお話でもなさいよ。

牧師 (情愛を含んで、然しあてつけるやうに) あゝ、いゝえ。私や話は出来

ない。説教しか出来ない。

カンディダ (猫撫で聲で) ちや、来てお説教なさいな。

バーゲス (強く、争ふやうに) これさ、これ、カンディ。べらぼうな!

レクシー、ミル 入来る。心配気な事ありげな顔をしてゐる。

レクシー (馳けよつてカンディダと握手して) 奥さん、御機嫌よう。ようお歸りになりました。

カンディダ 有難う、レクシー。御存じでせう、ユージーンさんを!

レクシー え、く。如何です、マーチバンクスさん。

マーチ 有難う。

レクシー (牧師に) 唯今、聖マシウ教會から参つたんですが、皆があなたの電報を見て大變に愕ろいてます。別段變つた事はないのでせうな?

カンディダ どういふ電報を打つたんです、あなた?

レクシー (カンディダ) 先生は今晚あの會の爲めに講演をなさる筈でした。で、會はメーア、ストリートの大きな會場を借入れて廣告のピラにも大分費用をかけたんです。所が先生からの電報では、どうしても行かれない、といふのでしたから、まるで雷がおつちたやうな騒ぎでした。

カンディダ (驚いて、何か變だと懸念し始めて) 演説なさる約束を斷つたんですね!

バーゲス 臍の緒切つて始めてだらう。なあカンディ?

レクシー (牧師に) 會ではあなたにお考へなほしを切願する電報を發する事に決議したんですが、お受取りになりましたか?

牧師 (堪へ兼ねるのを抑へて) はあ、はあ。受取りました。

レクシー 返信料済みでしたか。

牧師 え、さうでした。返事をやりました。行けないのです。

カンディダ 何故ですよ、あなた？

牧師 (殆ど激烈に) 私が好ましく思はないからさ。あの手合は私が人間だといふ事を忘れてゐる。私をば、一生毎晩々々あの手合を樂しますす爲めに、回轉させらるべき蓄音機のやうに思つてゐる。一晩位は、妻や友達と共に家に留まつてもよささうなものだ。

一同は此の氣焔に驚く、ユー・ジョン許りは依然としてゐて、其の表情を變へない。

カンディダ お、あなた、そんな事をなすつて明日、またきつと良心が咎めますよ。すると私が困つちまうわ。

レクシー (こはくながら切に) 私は無論これは先生に對して、甚だ無理なお願であると思つてゐたんですが、然し會では代理の演説者を頼まうと、八方へ電報を打つたんですけれど、得られないのです、不可知協會の會長の外には。

牧師 (言下に) 至極けつこうだ。其の上を望む必要がない。

レクシー 然しあの人は基督教から社會主義を分離させようと、常に手強く主張してゐる人です。是迄吾々の造り上げたあらゆる善い事を打毀しかねません。勿論これはあなたが一番よく御存じです。然し——(言ひかけて躊躇する)。

カンディダ (媚るやうに) ねえ、いらつしやいよ、あなた。私達も行きますせう。

バーダス (不平聲で) おい、カンディ——！ これさ！ 此處で火にあたつてゐようせ心持よく。二時間より長くは行つてゐるにや及

ばんだらうから。

カンディダ 會に行つたつて心持はようござんすよ。私達は演壇に列んで、豪い人達になりませうよ。

マーチ (怖れて) お、壇に上るのは止して下さい。いやです。皆が私達を眺めるでせう。いやです。私は會場の後ろのはうにゐませう。

カンディダ 大丈夫よ。ジエムスを見るのに忙しいから、あなたなんかに眼を付けやしませんよ。

牧師 (頭を轉じ肩越しに、カンディダを意味ありげに見やりて) プロッシーの病かね、カンディダ、ええ？

カンディダ (快活に) さうよ。

バーゲス (怪訝に思つて) プロッシーの病！ 何を言つてるんだね、ジエ

ムス？

牧師 (バーゲスには構はず、立ち上り戸口へ行き、戸を開けて命令の調子で) ガ

ー ネットさん。

プロッサー (遠くて) はい。唯今。

一同待つてゐる。バーゲスだけは物とレクシーの傍へ行つて、片隅へ引張つて行く。

バーゲス ちよつと、ミルさん。プロッシーの病てな何でがす？ 何處か

悪いんですかね？

レクシー (打明け話をすると、いふ風で) さあ私もよくは知りませんがね、今朝私に言つた事なんざ大分變でしたよ。時折氣が變になるのぢやないかと思ひます。

バーゲス (呆氣に取られて) ぢゃあ、傳染するんだね、きつと！ 一軒の家

で四人まで！（遠邊に戻る、僧侶の大氣に包まれると人智は忽ちあぶな
つかしくなるものかと考へ惑つて）

プロサー（開口に現はれて）何ですか、先生！

牧師 聖マシウ協會へ電報を打つて下さい私が行くつて。

プロサー（驚いて）あなたを待つてやしないでせう。

牧師（断乎として）私の言ふ通りになさい。

プロサーピンは怖れてタイプライターの前に腰を下し、命令通りに
する。牧師はマーチバンクスのほうへ横切る。カンデイダは始終加は
り行く怪訝と疑惑とを以て夫の動作に注意する。

牧師 バーゲスさん、あなたは行きませんか？

バーゲス（打消すやうに）さういふ譯ちやあねえがよ。只ねえその今
日は日曜日でねえんでね。

牧師 そりや残念ですね。私はあなたが、あそこの會長への紹介をお
望みかと思つたんですが。あの人は市會の工務委員ですから、請負
などには多少勢力があるんです。（バーゲス忽ち目を覺す。牧師はさ
うだらうと豫期して、一寸待つて言ふ。）行きますか？

バーゲス（熱心に）勿論行くよ。お前の演説はいつ聞いても面白いか
らな！

牧師（プロサーピンに向ひて）ガーネットさん、他に何も用がなければ、會
で少し速記をして貰ひたいんです。（プロサーピンは口を利くのを恐
れて、只頷く。）レクシー、君は来るだらうね？

レクシー 無論です。

カンデイダ 私達も皆行きますよ、あなた。

牧師 いゝや。お前さんは来るのぢやない。そしてユージーンさん

も来るのぢやない。お前さんは此處に残つて、此方のお相手をしなさい——お前の歸宅祝ひに。(ユーシーンは息を止めて立上る。)

カンディダ だつて、あなた——

牧師 (命令的に) 是非さうなさい。お前さんは行きたくないのだ。此方だつて行きたくないのだ。(カンディダ何か抗辨せんとする。いや、お構ひでない。お前さんがゐなくとも人は澤山ゐます。お前さん達の椅子は、まだついに私の説を聞いた事のない新しい聴衆が要するであらうから。)

カンディダ (困つて) ユーシーンさん、あなたいらつしやらない?

牧師 いや私はユーシーンさんの前では、熱衷して説教するのを憚るよ、説教に對しておそろしく批評的だからね。(ユーシーンを眺めて) あの方は私が恐れてる事を承知だ、今朝その話があつた。で、私はど

の位あの方を恐れてゐるかあの方に見せようと思ふのだ、お前さんに守をさせて残しておいて。ね、カンディダ。

マーチ (鋭く感じて獨語する) えらい。立派だ。(又股を下す、口を開いたまゝで傾聴しつゝ)。

カンディダ (心配さうに疑懼して) だつて——だつて——どうかしたの、あなた? (非常に心配して) 私には分からない——

牧師 あゝ、其の分からないのは私かと思つた。(カンディダを優しく兩腕で抱き、前額に接吻し、やがて靜かにマーチバンクスのほうを見返る。)

第三幕

夜の十時過ぎ。窓掛が引かれて、ラムプが點されてある。ダイブラ
イターは蓋を被せられ、大卓子は奇麗に片附けられ、總ての物が其の日
の仕事の終つた事を示す。

カンテイダとマーチバンクスの頭上の爐棚にあつて、彼は小さな椅子に掛
て聲高に読んでゐる。彼の傍敷物の上には原稿の積重ねたのと、二冊
の詩集が置いてある。カンテイダは安樂椅子にもたれつゝ、手には輕
い眞鍮の火掻を眞直に握つて珍らしさうに其の尖を見つめ、兩足を煙
のはうへ延ばし、踵を爐棚にのせてゐる。自分の容態にも周圍の物にも
全く無意識の體である。

マーチ (朗讀を中止して) これまでの詩人は、みんな其の思想を短詩の

中に収めたものです。さうせざるを得なかつたのです。(同意を求めてカンディダを見ると、カンディダは火搔に氣を取られてゐる)。あなた聽いてゐらつしやらないんですか？ 返事がない。奥さん！

カンディダ (驚いて) ええ？

マーチ 聽いてゐらつしやらなかつたんですか？

カンディダ (悪かつたと心づいて馬鹿丁寧に) 聽いてゐましたとも。面白い事ね。さあ、あとを讀んで頂戴。それからその天使がどうなる

か、聞きたくてならないのよ。

マーチ (手から稿本を床に落して) 御免なさい、御迷惑をかけまして。

カンディダ いゝえ、決して迷惑どころですか。どうぞね、先きを聞かせて頂戴。ね、ユージーンさん。

マーチ あの天使の詩は、十五分も前に讀んぢまつたんです。あれか

らいろく／＼のを讀んだのですよ。

カンディダ (氣の毒げに) まあ、濟みませんでしねえ、ユージーン。此

の火搔が私を魅かしたに相違ない。(火搔を下へ置く)。

マーチ 私は、それが爲めに、おそろしく不安でならなかつたんです。

カンディダ 何故さう言つて下さらなかつたの？ 直に下に置いたも

のをねえ。

マーチ さうしたら、あなたが不安を感じなさりやしないかと、恐れられます。あれが何だか武器のやうに見えたんです。私が昔話の英雄であつたら、二人の間にきつと抜放つた劍を置いたに相違ないんですから。もしモーレルさんが入つていらしたなら、あなたは間に劍がないから、代りに火搔を持つてゐたのだと、思ひなすつたでせう？

カンディダ (げん顔に) 何ですつて? (不審さうに) マーチパンクスを見
やりて) おつしやる事がよく分りませぬわ。あなたの短詩がま
るつきり私を馬鹿にしちまつたわ。何故私達の間(あひだ)に劍を置かなけ
りやならないんですか?

マーチ (はづして) いゝえ、何でもありません。 (屈んで稿本を取らうと
する)。

カンディダ ユージーンさん、もうさうしてお置きなさいよ。詩を好く
にも限りがありますわ、いくらあなたの詩だからつても。あなたは
二時間以上も読んで下すつたんですよ——ジエームスが出かけてか
ら。もうお話しにませうよ。

マーチ (おびえ立つやうに立上つて) いゝえ、お話ししてはなりません。
(困り果てたといふ風に立上り、突然言添へる) 私外へ行つて、公園をあ

るいて来ようと思ひます。(戸口へ行きかける)。

カンディダ 馬鹿おつしやいよ、公園はもう疾うに閉つてますよ。さ、此
處へ来て爐氈の上で、いつものやうに無駄話でもなさいな。面白い
お話が聞きたいわ。いや?

マーチ (半分は怖れ、半分は狂喜して) はい。

カンディダ ぢや、いらつしやいよ。(場所を明ける爲めに椅子を少しす
せる。マーチパンクスは躊躇したが、やがてこはく、爐前の敷物の上(あし
を投げだし、仰向いて頭をカンディダの膝に横へて見上げる)。

マーチ お、私今夜はほんとにみじめでした、正しい事をしてゐたか
ら。今は悪い事をしてゐるので私は幸福です。

カンディダ (面白い事を言ふと思つてやさしく) さうでせう。きつとあ
なたは、もう立派な一人前の瞞着者の悪者だと思つてるんでせう——

—それを自慢にしてね、さうぢやない？

マーチ (急に其の頭を擡げ、少しふり向いてカンディダを見て) 氣をおつけなさい。私はあなたよりもずつと年上なんですよ、あなたがそれに心付きさへすれば。(膝で一廻りぐるりと廻り、手先を組合した兩腕を

カンディダの膝に載せ、衝動を募らせつゝ、語る、其の血は騒ぎはじめでゐるので。) 私あなたに悪い事を言つてもようござんすか？

カンディダ (少しも恐るゝ色なく、又冷淡になりもせず、マーチバンクスの熱情に對しては充令の敬意を有しながら、一寸賢明な母親といふ風に冗談をもまぜて) いけません。けれど、あなたが本當に感じてゐる事なら

言つてもよろしい。どんな事だつても構やしません。あなたの本當の心をお話なさる以上は、私怖れやしません。けれども様子ぶるのはいけませんよ——深切ぶつたり、悪者ぶつたり、詩人ぶつたりす

るのはいけません。あなたの名譽と眞實とに頼りませう。さあ何でも言ひたい事をおつしやい。

マーチ (其の眼が一種悲哀な精神的の光を放つに連れて、熱烈な表情は其の唇からも鼻孔からも全く消え去つてしまつて) お、私はもう何も言ふ事が出来ない。私の知る限りの言葉は總べて様子ぶつてるんです、たつた一つのほかは。

カンディダ 其のいつてのは何？

マーチ (靜かに、其名が音楽のやうなのに、恍惚として) カンディダ、カンディダ、カンディダ、カンディダ。私は今さう言はなければなりません、あなたが私の名譽と信實とに頼るとおつしやつたんですから。さうして私は曾てモーレルの奥さんといふやうな事を思ひもせず感じもしませんでした。いつでもカンディダです。

カンデイダ 勿論。それでカンデイダにどういふことを言はうとするのです。

マーチ 唯あなたの名を十度も繰り返したいばかりです。あなたがそれが其の度に、あなたに對する祈禱だとは感じませんか？

カンデイダ で、祈ることが出来るかと幸福ですか？

マーチ はい、非常に幸福です。

カンデイダ さあ、其の幸福があなたの祈禱に對する應報なんです。何かその他に要るんですか？

マーチ (有難げに) いゝえ。私は天堂に上つたんです、何の不足もない天堂に。

牧師 入来る。彼は、開口に立留まり、一瞥で光景を見て取る。

牧師 (嚴格に、自制して) お邪魔ぢやないかね。

カンデイダは驚いて、亂暴に立上つたが、些しもどぎまぎした様子はなく、自分で自分の態度を笑つてゐる。ユーシオンは尙跪いたまゝで、兩手を椅子の上に掛け、倒れかゝるのをひつこたへ、口を開いたまゝで、ちつと牧師を見つめてゐる。

カンデイダ (立上ると同時に) おゝ、あなた、私づくりしたわ！ ユーシオンさんと話し込んで、あなたから、鍵の音も聞きませんでしたの。會のはうはどんなでした？ 演説はよく出来て？

牧師 今夜程、よく出来たことはなかつた。

カンデイダ そりや上等でしたね？ 集金はどの位ありました？

牧師 訊くのをお忘れな。

カンデイダ (ユーシオンに) 餘程立派に演説したのよ、でなくば訊くのを忘れる筈はありません (牧師に) 他の人達はどうしました？

牧師 私よりも先きに抜けたのだよ。私は到底逃げられまいかと思つてゐた。何處かで夕食をしてゐるだらう。

カンディダ (世帯じみた調子で) おゝ、それぢやあ、マリヤを寢させよう。

さう言つて來ませう。(臺所へ出て行く)。

牧師 (マーチバックスをきつと見下して) え?

マーチ (爐前の敷物の上に足を組交して囁りながら、實際に牧師と心安げに

—どころでなく、茶目式のひょうきんな調子で) え?

牧師 何か私に話す事がありますか?

マーチ 私がこゝで内密で自分を馬鹿にしてゐたといふ事位です、あ

なたが公然御自分を馬鹿にしてゐらつしやる間に。

牧師 それを同格とは言へますまいね。

マーチ (熱烈に跳び起きて) いゝえ全く同格です。私はまつたくあな

たと同様に善人の真似をしてゐたんです。あなたが、さつき英雄ぶつて私をこゝにカンディダと一緒に残して出掛けましたらう——

牧師 (思はず) カンディダ!

マーチ えゝ、さうです。私もずつと乗込んだんです。英雄主義は傳

染的です。あなたからうつされたんです。私は誓つた、あなたの留

守の間は、一と月以前にあなたの面前で言はなかつたやうな事は、一

言も言ふまいと私は誓つた。

牧師 あなたは、その誓を守りましたか?

マーチ (突然安樂椅子の角に奇怪な態度で腰をかけて) 私は十分間程前

までもそれを守る程阿呆でした。その瞬間までは——自分の詩や

——誰かの詩をやみくもに讀んで上げてゐたんです、會話をしない

やうにする爲めに。天國の門の前に立ちながら、入る事を自ら拒ん

でゐたのです。おゝあなたにや想像がつくまい、どんなにそれが英雄らしかつたか、どんなにそれが不愉快であつたか！ 其の中に――

牧師 (じつと不安の心を制して) 其の中に？

マーチ (何の曲もなく椅子の中へ入り込んで、平々凡々のぬ住ひになりながら)

ら 其の中に、奥さんが、もう詩を聴くのはいやだとおつしやつたんです。

牧師 (そこで遂に天國の門へ近づいたんですか？)

マーチ さうです。

牧師 え？ (猛烈に) 言ひなさい。私の心を察しないんですか？

マーチ (静かに、音楽的に) その時、奥さんが、天使になつちまつた。するとそこに炎々たる焔の劔があつて、八方から向つて來たもんだから、

近寄る事が出来なかつた。其の門は實は、地獄の門だといふ事に氣

がついたもんだから。

牧師 (勝ち誇つて) 妻が君を拒絶つけたんだ！

マーチ (激しき輕蔑の態度で立上つて) 大違ひ。あなたは馬鹿です。奥

さんがさういふ事をするやうなら、私は決して天國に上つたなぞと

は思はなかつたでせう。私を拒絶つけたつて！ あなたはそれが

私を救つたのだらうと思ふんですね――貞女の怒りが！ おゝ、あ

なたには、奥さんと同じ世界に住む價值はない。(室の彼側へ蔑むが

如くに向かふ)。

牧師 (居所をかへないで、静かにマーチパンクスを見守つてゐたが) ユー

ジョン、君は私に悪口すれば、それで以て自分の價值が上ると思つて

ゐるのかい？

マーチ 無數の教訓がこれでおしまひです。モーレルさん、私は要す

るにあなたの説教には重きを置きません。私はあなた以上に説教し得ると信じます。私が逢ひたいと思ふのは、カンディダさんが夫にした其の人です。

牧師 夫にした其の人——私の事ですか？

マーチ レヴェンド、ジェームス、モーヴァー、モーレルといふ道學者の空論家のことをいふのではありません。レヴェンド、ジェームスが黒い上着の何處かに匿してゐるに相違ない眞實の人——カンディダさんが戀したその人のことを言ふのです。前で箴めるカラーの釦を後に變へたゞけで以て、あなたがカンディダさんのやうな婦人の愛を得る譯がありません。

牧師 (大膽に、確實に) カンディダが結婚を約束した時分も、私は矢張り此の通りの道學者で、空論家であつたんです。黒い上着を被て、カラー

の釦は前ではなく後で箴めてゐたんです。あなたは私が職に不誠實であつたら、妻がもつと愛したであらうと思ひますか？

マーチ (ソーファの上で、兩脚の蹠を抱きしめて) お、奥さんはあなたを容したのだ、ちやうど私が臆病者で弱蟲で、あなたの所謂泣き蟲の小童とか何とかであるのを容したやうに。(夢を見てゐるやうに) あゝいふ婦人は神通力を持つてます、吾々の精神を愛して呉れる。吾々の愚かさや虚榮心や妄想や、又はカラーや上着や、又は其他吾々の身體に絡まつてゐる古布や襪をば見ないんです。(茲に到つてちよつと考へて、やがて振向き、一心に牧師に質問する) 私が知りたいのは、どうしてあなたがあの邪魔になる煽の劔を通り過ぎたかといふ事です。

牧師 (意味ありげに) 多分、十分間たつたところで、邪魔が入らなかつたからでせう。

マーチ (びつくりして) 何ですつて?

牧師 人はどんな高い山頂にでも登る事が出来る、けれどもそこに長く居着く事は出来ない。

マーチ それは嘘です。そこにいつまでも居着かれます。いや、そこにのみ。他の瞬間に於てこそ何等の安心をも得ません、又何等人生の無言の光榮をも感じません。何處で私の瞬間を費させようといふんです。若し其の頂に於ていなければ?

牧師 流しもとで玉葱をきざんだり、ラムプの油を注したり。

マーチ でなくば演壇で安土器のやうな魂の數々を磨いたりか?

牧師 それも好い。そこで私は價貴き瞬間を得、又其の瞬間に於て彼女の愛を求める権利をも得たのだ。私はその瞬間を人から借りはしなかつた、又他の人の幸福を盗む爲めにそれを用ひもしなかつた。

マーチ (稍、さげすむやうに、煙のはうへつかく退つて) きつと一斤の乾酪

でも買ふやうに、あなたは正直に談判をなすつたんでせう。(爐前の敷物の端に立止まつて、考へ込み、牧師に背を向けて、獨語) おれは、唯乞食のやうな風に近づく事が出来た許りだ。

牧師 (ぎょつとして) 凍えて死にかゝつてゐる乞食が! 妻のショールを呉れるといふ!

マーチ (驚いて振向き) 私の詩に御加筆下すつて有難う。え、それでもよろしい。凍えて死にかゝつてゐる乞食が、奥さんのショールを呉れるといふ。

牧師 (激昂して) ところが妻が拒絶つけたのだ。何故拒絶つけたか言はうか? これは妻に代つて言ふ事が出来る。それは畢竟——
マーチ 拒絶つけやしません。

牧師　しない！

マーチ　奥さんは何でも私の望むものを呉れると言つたんです。シヨールでも頭上の星の輪でも手に持つてゐる百合の花でも其の足の下の三日月でも――

牧師（胸先を掴んで）さあ、ほんとの事を言ひなさい。あれは私の妻だ。詩人の腐つた囁語なんか聞きたくはない。若し私が妻の愛を失つて、君がそれを得たなら、妻を束縛する一つの法律もないといふ事は承知だ。

マーチ（恐れもせず抵抗もせず、奇妙にも）モーレル、掴むならシャツのカラーを掴んで呉れ。奥さんが後でなほして呉れるだらうから、今朝のやうに。（静かに喜悅して）奥さんの手で觸つて貰へる。

牧師　此の徒小僧が、わしに對してそんな事を言ふのは、危険だといふ

事を知らないか？　それとも（ふつと疑念を起して）何か譯があつて大膽になつたのか？

マーチ　もう怖くはないのだ。前にはお前が大嫌ひだつた、それだから觸られるのが堪らなかつた。然し今日――奥さんがお前を苦しめた時に――お前が奥さんを愛してゐるのを悟つた。それからおれはお前の友達になつたんだ。締め殺すなら締め殺せ。

牧師（手を放して）ユージーン、もしそれが眞赤な嘘でないなら、かりにも人間らしい感じが些しでもあるなら――言つて呉れ、私の留守中にどんな事があつたかを。

マーチ　どんな事があつた！　そりやその燐の劍が――（牧師堪へ兼ねて地圓太を踏む）。さあ、平たく散文で言ふと、私の奥さんに對する愛は、非常に靈妙なだから、只さういふ愛をしてゐるといふ幸福以外

には何物をも要求しないんだ。ところで私が其の最高の頂から降りて来ないうちに、お前がはいつて来たんだ。

牧師（深く苦悶して）　　「じゃあ、まだ決定されないんだ——みじめな疑惑だ、まだ。」

マリーチ　みじめな！　私は人間の最も幸福なものだ。私は今奥さんの幸福の外は何にも希はない。（感情的に熱して）お、モーレル、私達は二人とも奥さんを思ひ切らうよ。おれのやうなみじめなちつぽけな神経質か、お前のやうな分曉漢の牧師か、どちらかを擇べといふ必要はないぢやないか？　二人はこれから巡禮に出かけよう、お前は東へ、おれは西へ、奥さんに相當した男を捜しに——紫の翼の生へてゐる、或る美しい大天使かなんか——

牧師　馬鹿な！　お、若し彼女がおれを棄て、お前を取るほどに本

心を失つた時には、誰が彼女を保護するか？　誰れが彼女を助けるか？　誰が彼女の爲めに働くか？　誰が彼女の子供等の父になるか？　（心を攪亂されたやうになつてソーフアに掛け、膝に腕を据え、拳で頭を支へる。）

マリーチ　（荒々しく指を弾き鳴らして）奥さんはそんな馬鹿げた質問はかけないよ。奥さんこそ、保護したり、助けたり、働いて呉れたりする誰かを得やうとして居られるのだ。——保護したり、助けたり、働いて呉れたりする、子供達のお父さんになる誰かを得やうとして、成人で以て子供に歸つた誰かを。お、お前は馬鹿だ、大馬鹿さんだ！　モーレル、おれがその人だ、おれがその人だよ。（興奮して、叫びつゝ、踊り廻る）お前は女がどんなものか理解しないんだ。奥さん呼びにやつて、モーレル、奥さんを呼びにやつて、どちらのはうを取るか——

が開いてカンデイダが入る。マーチバンクスは石のやうになつて立止まる。

一五六

カンデイダ (愕き呆れて闊口で) あらまあ、あなた、何をしてるの、ユージンさん？

マーチ (變な調子で) ジェームスさんと私と説教くらべをしてるんです。そして私が負かしちまひさうです。(カンデイダは急に振向いて牧師を見る。牧師の苦しんでゐるのを見て急いで其の傍に行き、ひどく困つてマーチバンクスを手強く非難する。)

カンデイダ あなたは、ジェームスをいぢめてゐたのですね？ いけませんよ、ユージンさん、解りましたか？ (片手を牧師の肩にかける、そして氣を揉む餘り、つい全くいつもの細君的氣轉を忘れて)。家の子はいぢめさしやしません。私が附いてます。

牧師 (傲然と立上つて) 附いてる！

カンデイダ (それに構はず——ユージンに) 今まで何を言つてたんです？

マーチ (怒れて) 何も。私は——

カンデイダ ユージンさん！ 何もですつて！

マーチ (なさげなげに) それは——あの——まことに濟みませんでした。もうしません。決してしません。もうあの方を構やしません。

牧師 (憤然として、ユージンのほうへ居丈高になつて進む) 構やしない！

此の小童——

カンデイダ (遮つて) しっ！——いゝえ。私に任してお置きなさいよ、あなた。

マーチ お、あなた私を怒つてるんぢやないでせうね？

一五九

カンディダ (嚴格に) いゝえ私——大變に怒つてゐるんですよ。私あなたを茲から追ひ出したいと思つてゐるんです。

牧師 (カンディダの權幕に驚き、且つ妻のお蔭で人から救はれるといふ境遇を有難く思はぬところから) 靜かに、カンディダ、靜かに。私の事は私が處分します。

カンディダ (子供を愛撫するやうに) あゝ、さうですとも。勿論、あなたは。

然し、いちめられたり、酷い目に遭はされたりしてはなりませんもの。

マーチ (殆ど泣き出しかけて、戸口へ向ひ) 私やもう行きます。

カンディダ おゝ、行くにや及びません。私あなたをこんな夜中に追ひ出すことは出来ません。(激烈に) 馬鹿な人だ! 馬鹿な!

マーチ (絶望的に) 然し何をしたんです、私が?

カンディダ あなたが何をなすつたか——始終此處で見てゐた程に私

よく知つてますよ。まああなたにも似合はない! あなたはまるで子供だ。黙つてゐる事が出来ないのね。あなたはまるで

マーチ 私はたとへ十度死んでも、あなたには少しの苦痛をも與へたくないと思つてゐます。

カンディダ (此の子供らしい言を限りなく踐しむ如く) あなたが死んだら、嗚私の爲めになりませうよ!

牧師 これ、カンディダ、其の言ひ争ひは餘り見つともよくありません。これは二人の男子間に起つた事件だ。私が決定すべき事件です。

カンディダ 二人の男子! あれを男子だとおつしやるんですか?

(ユーシーズンに) 此の腕白が!

マーチ (叱られて、一種奇異な甘へる勇氣を振ひおこして) 子供のやうに叱られるんなら、私も子供らしい言譯をします。あの人が始めたん

です。あの人は私よりも大きいんです。

カンディダ (牧師の威厳に降ると懸念する所から少々自信を失ひながら) そんな事があるもんですか! (牧師に) ねえ、ジェームス、あなたが始めたんぢやないでせう?

牧師 (踐蔑む如く) 無論。

マーチ (憤然として) おゝ!

牧師 (マーチパンクスに) 君が始めたのだ——今朝。(カンディダは此の一言とユージョンが朝告げたとか言つて、夫の意味ありげに午後には句はした事とを早速に思ひ合して、さてはと疑つて夫の顔を見る。夫の牧師は無禮なされた優越者の態度で言葉に力をこめて言ひ進む) 然し君の言つた他の點は事實だ。(言葉先をカンディダのはうに轉じて) 確かに私のはうが大きくもあり、又強くもあると思ふ。だから此の事は私に一任

して貰つたほうが好い。

カンディダ (再び宥めて) さうです。けれども——(心配げに) 私今朝の事が解りませんの。

牧師 (静かに制して) 解らんでも好いよ。

カンディダ けれども、ジェームス、私——(表口の呼鈴が鳴る)。おや、ちよつ! 皆が歸つて来ましたよ。(彼等を迎へる爲めに出て行く)。

マーチ (牧師の傍へかけより) おゝ! モーレルさん、怖ろしいことになつたぢやないか。奥さんは怒つてる。私を憎んでる。どうしたら好いでせう?

牧師 (自分の頭髪を握んで、奇異な絶望の表情で) ユージョン、私の頭はぐらく廻つてゐる。今に笑ひだすかも知れない。(室の中央をあら

マーチ (心配げに尾いて歩いて) いけない、いけない。奥さんは私があなをヒステリーにしたと思ふでせう。笑つちやいけない。

騒がしい聲と笑聲が近づく。レクシー、ミルは眼を輝かし、非常な意気揚々たる様子でパーゲスと共に入来る。パーゲスは背ぎつて得々としてぬるが、氣を許さない。ガーネット女はぐつと氣の利いた帽子とジャケット姿で其の後から来る。其の眼は前よりも輝いてはぬるが明らかに何か疑懼することがあるらしい。片手をタイプライターの卓子に載せて身を支へ、卓子を背にして一方の手で額を拭つてぬる。少しく勞れて眩暈でもするやうに。マーチバンクスは又羞かみ始めて牧師の書棚のある窓に近い隅のはうへへこそくと退く。

レクシー (愉快げに) 先生、あなたをお祝ひ申さなくちやなりません。(牧師の手を握つて) 實に今日の御演説は高尚で立派で、天來的でした。これまでにない御演説でした。

パーゲス 全くだつたよ、ジエームスさん。一番しまひの言葉まで、ちつとも眠らんで聴いちまつた。ねえ、ゴーンネットさん。

プロサー (迷惑さうに) お、私やあなたに構つちやありませんでしたよ。速記に忙しかつたから。(手帳を取出し、自分の速記を眺めて殆ど泣きだしさうになる)。

牧師 プロクシーさん、少し早かつたかね？
プロサー そりや實に早かつたんですよ。一分間に九十語以上は出来なんでしょう。(速記帳を明日の仕事として、タイプライターの傍へ腹立たしげに投げつけて、少しく氣を晴す)。

牧師 (慰めて) まあ、よろしい。かまはん、皆夜食は濟んだのですか？
レクシー パーゲスさんの御厚意で、ベルグレーブでそれはくくけつこうな夕食をいたいたんです。

バーゲス (大盡顔をして) 何のく、ミルさん。(可憐に) 甚だお粗末な
事でした。

プロサー (シャンペンをいたゞきましたよ。私始めていたゞいたの。
全くぐらぐらしますわ。

牧師 (驚いて) シャンペン付き! そいつはけつこうだつたね。さう
いふすばらしい事になつたのは、私の演説のお蔭かね?

レクシー (言葉巧みに) 半ばはあなたの演説半ばはバーゲスさんの御
好意です。(更に新たに愉快を感じたらしく) そしてあの會長は何と
いふ好い人でせう先生! 食卓へ列なつて呉れましたよ。

牧師 (バーゲスの顔を見ながら長く引つばつて意味ありげに) は、は、あ、會
長を! それで分かつた。

バーゲスは、已が外交的老手腕に對する大満足な、打消しの咳拂ひで

掩ひかくしながら爐邊に退く。レクシーは腕を組み興奮した態度で、
物人壺にもたれかゝつてゐる。カンディダは玻璃盃とレモンと湯をい
れた罐とを載せた盆を持つて入來る。

カンディダ レモンのほしい方がありませんか! 御存じの家風で、禁酒
ですから。(卓上に盆を置き、レモン搾りを取上げ尋問顔に一同を見廻す)。

牧師 要らないよ、お前。皆シャンペンを飲んだのだ。プロッシーは誓を
破つたとき。

カンディダ (プロサービンに) まさか、シャンペンをお飲みなすつのぢやな
いでせう?

プロサー (頑固に) いゝえ、飲みましたの。私は唯ビールを禁じたので
すよ、シャンペンぢやありません。私ビールは好かないんです。先生
返事を書くお手紙がありますか?

一六九
牧師 今夜はもうありません。

プロサー さうですか。さようなら、皆さん。

レクシー (深切げに) 私が家までお送りしたほうが宜くはないでせうか、ガーネットさん？

プロサー いゝえ有難う。今夜は誰にでもあぶなつかしいやうな気がする、おんなもの飲まなけりやよかつた。(つと出て行く)

バーゲス (憤然として) あんなもんだ！ あの娘シヤンペンが何だか知らねえんだ！ ポムマリー、グリーンノは一環十二志六ペンヌもすらあ。あの娘たてつけに二盃もやつけた癖に。

牧師 (いさゝか心配げに) レクシー君行つて見てやつて下さい。

レクシー (驚いて) 然し、若し實際何でしたら——例へば街中で歌を唄ひ出したり、なんかされた時分には。

牧師 全くそんな事をやりかねない。だから安全に家まで送りつけてやつて下さいと言ふんだ。

カンディダ どうかね、レクシーさん、後生ですから。(レクシーの手を握り静かに戸口へ押しやる)

レクシー 行くのは確かに私の義務です。事件がなければ好いんですが。さようなら、奥さん。(皆のものに) さようなら。(出て行く。カンディダは戸を閉める)

バーゲス あの男も、二口ほどやつてから、えらくまた信仰談を始めたつけ。今の者あ酒が弱くなつた。(話題をすて、俄に爐から離れて) いや、ジエームスさん、もう戸締りをする頃だ。モーチバンクスさん、ここいらまでちよつびりお歸りのお供をしませうですかね？

モーチ (嚇かされたやうに) さうだ、私は行つたほうが好い。(急ぎ戸口

へ横切つたが、カンテイダその前に立塞がつて止める。

二五〇

カンテイダ (静かに權威を以て) あなたお掛けなさい。まだ歸るのぢやありませんよ。

マーチ (畏縮して) いゝえ私——私歸る積りぢやなかつたんです。(室内へ歸り來り、あさましげにソリーフに掛ける。)

カンテイダ お父さん、マーチバンクスさんは、此處に泊るんですよ、今夜。

バーゲス おゝ、さうか。では、おれやお暇をしよう。さよなら、ジェームスさん。(牧師と握手して、ユージーンの所へ行く。)

マーチバンクスさん、お前さまは寢臺の傍に燈火をつけておいて貰ひなされるがい。それ例の奴が起つた時燈火があると氣が強いや。さいなら。

マーチ 有難う、さうしませう。左様なら、バーゲスさん。(二人は握手す

る。バーゲス戸口へ行く。)

カンテイダ (バーゲスについて行く牧師を止めて) 此處にいらつしやい、あなた。お父さんの外套は私着せますから。(バーゲスと共に出て行く。)

マーチ モーレルさん恐ろしい場が始まるよ。怖くはありませんか?

牧師 いゝえ、ちつとも。

マーチ 私は前にはあなたの勇氣を羨みはしなかつたが。(おじんと立上り、牧師の前腕に訴るが如くに片手をおいて) 加勢して下さい、えり?

牧師 (そつとではあるが決然と其の手を却けて) 各自が自分を力に。君か私か、あれは今その何れかを選ばなくてはならない。(カンテイダが戻つて來たのを見て、室の他の側へ行く。)

ユージーンは悪い事をした小學生が、謹倫してゐるやうな風で再びソリーフに掛ける。)

二五一

カンディダ (二人の間に立つて、ユージーンに) あなた、後悔して?

マーチ (一生懸命に) はい、胸が裂けたやうです。

カンディダ さう、ちやもう赦して上げます。さあ、善い子になつて、寝臺へいらつしやい。私はジエームスにあなたのことを話したいんですから。

マーチ (愕然として立上つて) おう、そりやいけな、モーレルさん。私は茲にゐなくちやならない。出て行くのはいやです。あの事を奥さんに話して下さい。

カンディダ (疑念が募つて) 私に話すつて、何を? (マーチバンクスはそつとカンディダの眼を避ける。カンディダは振向いて、無言で問を牧師に移す。)

牧師 (大破裂に對する覺悟の身構へをして) 彼女に話す事と言つて別に

ない、唯 (此處で彼の聲は太くなり、抑揚のある悼ましげな柔しい調子になる。) 彼女は——若し實際私のものであるなら——此の地上に於ける私の此の上もない寶であるといふ事のみである。

カンディダ (冷やかに夫が辯士の本能に役せられて、現在の妻をば聖マシウ教會の聽衆でもあるやうに取扱ふのを不快に感じて) それきりですか、それだけならきつとユージーンさんにだつて言へませう。

マーチ (落膽して) モーレルさん。奥さんは私達を笑つてゐます。

牧師 (むつとして) 何も笑ふべき事はない。お前私達を笑つてるのかい、カンディダ?

カンディダ (静かながら怒りを帯びて) あなた、ユージーンさんはよく氣が附きます。はい、私笑ひたくなりかゝつてます。然し怒りたくなりかゝつてゐないとも限りません。(爐邊に行き、腕をマントルピース

にもたせかけ、片足を爐棚にかけて立つてゐる。其の間にユージーンは牧師の傍へそつと行き袖を引く。

マーチ (小聲で) モーレルさん、お止しなさい。何も言はない事にしませう。

牧師 (其の顔を見ようとしないうで、ユージーンを押しつけ) それはおどしに言ふのぢやあるまいね、カンデイダ。

カンデイダ (力を入れて警戒的に) 氣をつけて下さい、ジェームス。ユージーンさん、私あなたに出で行つて下さいと申しましたね、行きますか？

牧師 (片足をおろして) 出で行つちやいけな。是非ゐて貰ひたい。マーチ 出で行きます。(カンデイダに) あなたのおつしやる通りにします。(戸口へ向ふ)。

カンデイダ お待ちなさい！ (マーチバックス止まる)。ジェームスがゐ

て下さいと願つてるぢやありませんか。ジェームスは此處の主人です。

あなた御存じないの？

マーチ (専制に對する若い詩人の怒りを發して) どういふ權利で、主人ですか？

カンデイダ (靜かに) 説明して上げて下さい、ジェームス。

牧師 (驚いて) え、つ。どういふ權利によつて主人であるかといふ事は、知らないよ。私はさういふ權利を主張した事はない。

カンデイダ (限りなく批難する調子で) 知らないんですつて！ お、あなた、あなた！ (考へ込んでユージーンに) ユージーンさん、あなたにや、分かりますか！ い、え、あなたはまだ年が行かない。よろしい。此處にいらつしやい——ゐらつしてお覺りなさい。(爐から離れて二

人の間に立ち。 さあ、ジェームス、一體どうしたんですか？ さあ話して下さい。

一六

マリーチ (及び腰にふるえ聲で、牧師に叫く) いけませんよ。

カンディダ さあ、言つておしまひなさい！

牧師 (徐かに) カンディダ 私は先づお前に十分心を落ちつけて貰ひたいと思つた、誤解のないやうにするために。

カンディダ えゝ。 成程さうでしたらう。 然し御心配にや及びません、誤解なんかしやしません。

牧師 では——その——えゝ—— (躊躇する、有利と思はれる長々しい説明を思ひだし兼ねて)。

カンディダ え？

牧師 (露骨に) ユージーンさんが言ふには、お前があの人を戀してゐる

と。

マリーチ (狂氣のやうに) いゝえ、いゝえ、決してそんな事言やしません。

奥さん私そんな事言やしませんでした。 嘘です。 私は私はあなたを愛してゐるが、あの人は愛してゐないと言つたんです。 私はあなたを理解してゐるが、あの人は理解出来ないと言つたんです。 それを言つたのは、さつき爐の前でお話したあとではありません、實際さうではありません。 今朝の事でした。

カンディダ (感づきかけて) 今朝の事！

マリーチ はい。(信用して下さいと辯するが如くカンディダを見て、やがて卒直に言ひ添へる) 其のために私のカラーがあんなになつてゐたんです。

カンディダ (其の意味を直には呑込みかけて、暫く間を置き) カラーが！

一七

(夫に向ひ酷く不快を感じて) おゝ、ジームス、あなた、あの——？(音ひよどむ)。

牧師 (きまり悪さうに) カンディダ、私は知つての通り瘡癩が耐へにくい性質だ。ところであれが私に(身慄ひして) お前は内心私を賤蔑んでゐると言つた。

カンディダ (急にユージーンの方へ向いて) そんなことを言ひましたか？

マリーチ (怖れて) いゝえ！

カンディダ (手強く) ではジームスが全く嘘をついたんですね。さうですか？

マリーチ いゝえ、いゝえ。それは——あの(絶望的になつて口早に言開きを立てやうとして) ——それはそのダビデの妻の事です。それ

は家庭であつたことではないんです。公衆の前でダビデが踊つてゐるのを見た時です。

牧師 (討論家的に機敏に言葉尻を捉へて) 公衆の前で踊つてゐる時だよ、カンディダ。さうしておのが使命の力でその公衆を感動せしめつゝあると思つてゐた時だよ、其の實彼等は唯その——プロッシーの病に罹つてゐたに過ぎない時に。(カンディダは何か辯じやうとする、牧師は手を舉げてそれを制して調子高に) 怒つた風なんかなさるな——

カンディダ 風！

牧師 (言葉を續けて) ユージーンの言ふ事は本當だ。お前が二三時間前に言つた通り、いつでも本當だ。然しユージーンの言つた事は後にお前がすつと旨く言ひ表はした事ばかりだ。彼は詩人だから、何事をも見る事が出来る私は哀れな牧師だから、何物をも理解する事

が出来ない。

カンディダ (氣の毒さうに) あなたは馬鹿な子供の言つた事を氣にするんですか? 私が冗談に、それに似よつた事を言つたからつて。

牧師 其の馬鹿な子供は、子供の靈覺と蛇の伶俐とを兼ね備へてゐるのだ。彼は、お前は彼に屬すべきもので私には屬しないものだ。主張した。その當不當は兎も角も、私はさうかも知れないと心配せざるを得なくなつた。私は疑惑と猜疑とに苦しめられて、うろくしてゐたくない。私はお前と一緒に暮してゐながら、秘密を持つてゐたくない。私は卑劣極まる嫉妬の爲めに苦まされてゐたくない。彼と私と相談の上で——二人の中どちらかを、お前に擇ばせることに決めた。お前の決答が聴きたいのだ。

カンディダ (徐かに一步退る、牧師の感情が内心誠實なるにも係はらず其の

表面に浮き上る言葉の修飾を心憎しと思つて) おゝ! 擇ばなくては

ならないつて、私が? 私が、どちらかものにならないければならぬと言ふ事は、ちやんと決定つてゐるのでね。

牧師 (確實に) さうです。お前は判然と擇ばなくちやならないのだ。マーチ (心配げに) モーレルさん、あなたにや分らない。奥さんは、自分

は自分のものだと言つてゐるんです。

カンディダ (マーチパンクスに食つてかゝつて) それもあるし、まだ他にいろくあるんですよ、お坊ちゃん。それは今にお二人に分かりませう。そこで旦那様や坊ちゃん、あなたは私の選擇に對して何をお拂ひ下さるんです? 私は糶賣にかけられてゐるやうね。あなたはいくらに附けて下さるんです、ジエームス?

牧師 (非難するやうに) カンディダ (と言ひかけて、張りが一時に抜ける。兩



climax

眼に涙があふれ胸は一ぱいになる。雄辨家が手負した野獸となる。私

——言へない——

カンディダ (つい衝動的に傍へ行つて) あゝあなた——

マリーチ (あはて、狂気のやうに) お待ちなさい。不公平です。モーレル、苦しんでるのを奥さんに見せちやいけない。私だつて身をひしがれるやうに苦しいけれども哭いちやゐない。

牧師 (一生懸命に氣を取直して) うん、君の言ふところは尤だ。私は哀れみを求めるのぢやない。(カンディダの掛けた手を外す)。

カンディダ (後退りして、奥を冷して) 御免なさい、ジエームス。あなたに觸らうとしたのぢやありません。私はあなたの直段附を待つてゐます。

牧師 (謙遜の中に自尊心を見せて) 私が お前に與へるものと言つては、お

前を保護する私の腕力と、お前を後見する私の忠實な志と、お前を生かして行く私の能力と、勤勉と、乃至お前の品位を保たせて行く私の權威と地位との他には、何もないのだ。蓋し一個の男子として、婦人に與へ得るものはそれより他にはない。

カンディダ (極めて静かに) ユージーン、あなたは？ あなたは何を下さるの？

マリーチ 私の繊弱さです！ 私の頼りない淋しさ！ 私の心情の要求です！

カンディダ (深く感じた體で) 大層好い直段附ね、ユージーン。これで私の決心が付きます。

暫く黙つて、其の價値を量るやうにじろくと二人を見くらべる。今迄高い自信を持つてゐた牧師は今のユージーンの直段附を聽いて、

一八四
俄に断腸の恐怖に變じ其の心配を藏す力がない。ユージーンは身體
中を緊張さして、一筋肉だも動かさない。

牧師 (息苦しい聲で——心の底から洩れ出る苦悶を訴へる) カンディダ!

マーチ (覺えず賤蔑の聲を發する) 卑怯者!

カンディダ (意味深長に) 私は弱いほうへ付きませう。

ユージーンは忽ち其の意味を悟つて顔色が熔爐中の鋼鐵のやうに
白くなる。

牧師 (全滅になつたものやうに、却つておちついて頭をうなだれて) お前
の宣告を甘受します、カンディダ。

カンディダ あなた分かつて、ユージーン?

マーチ お、私は收けたんです。あの人はその負擔に堪へられませ
ん。

牧師 (信じられて、急に殺風景に頭を擡げて) 私だといふのかい、え、カンディ
ダ?

カンディダ (ほ、笑みて) ま、腰をかけてね三人がお友達のやうに寛い
で、其のことを話させよう、(牧師に) おかけなさいな、あなた (牧師は
爐邊から椅子を取る——子供椅子を、其の椅子を取つて頂戴、ユージ
ーン。(と安樂椅子を指す。マーチバンクスは黙つて、それを取り、何か冷
やかな底力で、も持つやうにして、それを牧師の次ぎ少し後ろに置くとカ
ンディダが掛ける。マーチバンクスはソファに行きかけてかける、尙無言で不
可思議な様子をしてゐる。席が定まると、カンディダが口を開く。穏やか
な、健全な、やさしい聲調の寛力で、二人の心を鎮めつゝ。ユージーンさん、
あなたは私にあなたの履歴を話して下さいましたね、婆やがなくな
つてからは、誰もあなたを構つて呉れる者がなかつたことや、お憫口

な、ハイカラな女の御同胞衆や、立身出世をなすつた男の御同胞衆が御両親に可愛がられなすつたことや、あなたがイートンの高等中学校でなさけない思ひをなすつた事や、それからお父さまが、どうかしてオックスフォードに戻らせようと思つて、あなたを飢える程の目にお遣はせなすつたことや、あなたが始終淋しく暮して愉快もなければ、歡待されたこともなければ、隠れ場所もなく、いつも獨りぼつちで、殆ど始終のやうに憎まれ、誤解されていらつしたことを、ね、可愛さうに！

マーチ (天賦の氣高さを示して) 書物がありました。自然といふものがありました。そして最後はあなたに逢ひました。

カンディダ 今は、そんな事は止しにして、此處にゐる此の子を見て下さい——私の子を——搖籃にゐる時分から甘やかされてゐた此

の子供を。私達は二週間に一度づゝ此の子の両親に逢ひに行くのです。ユージンさん、あなたも私共と一緒に來て、其の家の大立物の寫眞を見て下さい。赤兒の時のジエームス！めづらしい不思議な赤兒。八歳といふ高齡に達して貰つた學校の賞品を持つてゐるジエームス！クリケットの主將になつた時のジエームス！始めてフロクコートを着たジエームス！いろ／＼さま／＼の名譽を得た時々のジエームス！それからジエームスは腕力が強いでせう……あなた怪我しやしなかつたでせうね……そして利口でせう、そして幸福でせう！(だん／＼嚴格に) 只もうジエームスを力の強い利口な、幸福な人にしようといふので、お母さんや姉さん達が、どの位骨を折りなすつたでせう、あの人達に聞いて御覽なさい。たつた一人です、ジエームスのお母さんにもなり、姉さん達にもなり、妻君にもなり、其

信婚記

の上其の子供等に對する母親にもなるには、どの位骨が折れるか、それは私にお尋ねなさい。又玉葱をさぎむ手助けをするお客達のな
い時でさへ、家内の事はどんなに面倒であるか、それはマリヤやプロッ
シーに聞いて御覽なさい。又邪魔な商人がやつて来て、ジェームスの折
角な美しい説教を損ひさうな時、誰がそれを追拂ふ役をするか、其の
商人共にお尋ねなさい。與るべきお金がある時分に、與るのは此の
人。斷らねばならない時分に、支拂を斷るのは私。私はジェームスの
爲めに愉快な氣任せな愛の満ちた城廓を築いて、小さな俗なうるさ
い事の決して入らないやうに番をしてゐるんです。つまり、私が此
の人を此處の主人にしておくのです、自分ではそれと知らないで。
現に先刻あなたに問はれて、返事が出来なかつた位です、くれどね。
(やさしく反語的に) だから私があなたと一緒に出て行きさうに思つ

た時此の人は唯——私がどうなることだらうと、そればかり心配し
たんです！ で私を思ひとゞまらせようと思つて私に (前へもた
れて、一句を言ふ毎に愛撫的に夫の頭髪を撫でる) 私を保護する爲めの
腕力や、私を生活させる爲めの勤勉や、私の品位を保つ爲めの地位や、
私の——(頓座して) あゝ私あなたの折角の美しい文章をごつちや
にして、代なしにしてしまつたわね、ねえさうぢやなくつて？ (子供
を可愛がるやうに頷きする)。
牧師 (すつかり降参して、カンティダの脚下に跪き、子供のやうに正直に妻を抱
いて) 其の通りだ全く。私が斯うしてゐるのは全くお前のお蔭だ、お
前一人の骨折りだ、お前の愛情の賜物だ。お前は私の妻でもあり、母
でもあり、姉でもある。お前は私に取つては、あらゆる心盡しの、高
なれた。